JAAGAだより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町９番７号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
編集：JAAGA 事務局
印刷：東伸社
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

丸茂 吉成 新会長就任

Gen (Ret.) Yoshinari Marumo assumes President of JAAGA on May 16 2023

皆様こんにちは。

この度、令和５年度（2023 年度）総会において会員皆様方のご承認を受け、日米エアフォース友好協会（JAAGA）の第 13 代会長に就任いたしました丸茂吉成です。

JAAGA は、平成８年（1996 年）の創設以来、航空自衛隊の OB 会員および賛同される会員の方々で構成する組織として、日米空軍種間における一層の協力と相互理解の促進に寄与すべく各種活動を行ってまいりました。

残念なことに近年、我が国を取り巻く安全保障環境は、日々厳しさを増しています。そのような中で、昨年末には国家安全保障戦略をはじめ、所謂戦略３文書の改訂がなされました。これらにも述べられているように、今日どの国も一国では自国の安全を守ることはできず、わが国は日米同盟を国家安全保障の基軸と位置付け、協力を行ってゆくことが述べられています。

また、同文書では、航空自衛隊が、「航空宇宙自衛隊」へと進化することが記されました。米国では、航空自衛隊のもう一つのカウンターパートであり、設立４年目に突入した米宇宙軍が日々発展を続けています。

JAAGA としては、日米空軍・宇宙軍種間の協力や連携が少しでも円滑に進むよう、引き続き現役米空軍人、米宇宙軍人、航空自衛官の支援を行ってまいります。

一方で近年、JAAGA に限らず、自衛隊 OB 会の会員数の減少は著しいものがあります。役員はじめ関係者の負荷を軽くするとともに、時代に対応した魅力ある活動について知恵を絞ってまいりたいと思います。

会員皆様のご協力と積極的な活動への参加をお願い申し上げます。

令和５年５月 16 日　JAAGA 会長　丸茂 吉成

～　だより 第 64 号 目次　～

丸茂吉成新会長就任・・・・・・・・・・・・・・・・・1
令和５年度 JAAGA 総会開催・・・・・・・・・・・・・・2
令和５年度 JAAGA 講演会（パネルディスカッション）・2
令和５年度 JAAGA 懇親会・・・・・・・・・・・・・・5
空幕部長等講演会及び JAAGA 訪米成果報告会・・・・6
令和４年度日米優秀隊員表彰・・・・・・・・・・・・11
コープ・ノース 23 参加隊員を激励・・・・・・・・・・15
令和４年度 JAAGA 三沢基地等研修・・・・・・・・・・18
米空軍士官学校留学生支援「日光研修」・・・・・・・23
SPORTEX '22-B・・・・・・・・・・・・・・・・・25
日米相互特技訓練を激励支援・・・・・・・・・・・・26
米空軍将校 航空自衛隊勤務だより・・・・・・・・・・27
JAAGA グッズの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・28
航空自衛隊コーナー ・・・・・・・・・・・・・・・・29
米空軍コーナー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
ホリデーレセプションに参加・・・・・・・・・・・・32
新入会員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
令和５年度 JAAGA 事業計画・・・・・・・・・・・・34
令和５年度 JAAGA 役員・・・・・・・・・・・・・・34
賛助会員の皆様へ・・・・・・・・・・・・・・・・・35
投稿募集ご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
会員募集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

令和５年度 JAAGA 総会開催

JAAGA Annual Convention held on May 16 2023

JAAGA 総会は、５月 16 日（火）定刻 15 時から金古理事の司会により開催された。先ず審議に先立って令和４年度にご逝去された北川文夫氏（令和５年１月８日逝去）のご冥福を祈り、全員で黙祷を捧げた。

President Sugiyama delivers opening remarks

続いて杉山良行会長により「コロナも感染症５類に引き下げられ喜ばしいが、台湾有事の状況が気になってならない。台湾有事に抑止を効かせる日米同盟の強化はいよいよ重要であり、JAAGA の活動に誇りを持ち喜ばしくも思っている。これからも全会員心ひとつにして協力して活動していきたい。」旨の挨拶があった。

司会から、本総会は、正会員総数 258 名（令和５年５月 16 日 現在）の内、本総会出席者 64 名、委任状提出者 163 名の計 227 名をもって会則の規定により総会成立要件を満たす旨の報告があり、議案審議、報告事項の順に審議等が進められた。

議案審議は、会則により杉山会長が議長を務め、第１号議案「令和４年度事業報告」、第２号議案「令和４年度収支決算報告」、第３号議案「令和５年度事業計画案」、第４号議案「令和５年度予算案」及び第５号議案「役員の選任案」の５つの議案について、担当理事による説明ののち質疑応答が行われた。第１号議案については事業実績の概要及び会勢の現状、第２号議案については令和４年度収支決算の概要、第３号議案については事業運営の方針及び事業細部について説明がなされ、活発な質疑応答や提案が行われた。第４号議案以降の質問等は無く、第５号議案の新会長（丸茂吉成氏）、副会長（福江広明氏、上田知元氏、小野賀三氏、再任）及び監事（内山隆弘氏、山本祐一氏、再任）の各役員の選任を経て、全ての議案の審議が終了し全ての議案が提案通り承認された。

最後に報告事項として、前原理事長から役員会で選任された新理事（菊田哲氏、引田淳氏、島津貴治氏、川波清明氏、菅原政弘氏の計５名）が報告され、総会の議事をすべて終了した。

New President Marumo makes inauguration address

丸茂新会長から「先輩方のこれまでの歩みを引き継いで JAAGA を盛り立てていく所存であり、会員皆様のご意見を反映させていきたいと思いますのでご協力宜しくお願いします」との挨拶で締め括られ、総会は定刻より数分早く終了した。

（池田理事記）

「令和５年度事業計画」「令和５年度役員」：34 ページ掲載

令和５年度 JAAGA 講演会（パネル ディスカッション）

JAAGA Lecture as " Panel Discussion" held on May 16 2023

講演会は、「米軍視点の安全保障情勢などを実感する」ための重要な事業と位置付けられており、これまで総会に合わせて、在日米空軍の将官の方々に現下の安全保障情勢や日米同盟関係などについて講演を頂いてきた。

A big audience gathers in the assembly hall for the first time in four years. An unprecedented panel discussion format is proposed by Lt Gen Rupp

約４年ぶりとなる今回は、在日米軍司令官兼ねて第５空軍（以下「5 空軍」という。）司令官ラップ中将（Lt Gen Rickey N. Rupp, Commander of U.S. Forces Japan and 5th Air Force）の提案により、司令官ご自身と５空軍副司令官フリーデル准将（Brig Gen Jesse J. Friedel , Deputy Commander, 5th Air Force）とのパネル・ディスカッションという形で進められ、後半には質疑応答の時間が設けられた。

ラップ司令官からは、戦略的な観点からの「現在の安

全保障環境及び日本の防衛」、「日本の防衛能力向上のための焦点」、「日本の常設統合司令部（PJHQ：Permanent Joint Headquarters)」などについての話があり、フリーデル副司令官からは戦術的な観点からの「米空軍と空自の運用及び共同訓練についての現状」、「日本の防衛能力向上のための焦点」、「緊迫状況下（in contingency）における日米間の状況認識（SA：Situational Awareness）の共有」などについての話があった。

【現在の安全保障環境及び日本の防衛】

ラップ司令官：ロシアによるウクライナ侵攻が、世界的なインパクトを与えており、各国が各々の安全保障を真剣に考える状況となっている。プーチンには二つの誤算があり、西側の同盟に楔を打ち込もうとしたが、逆に西側の同盟関係は強固になり、NATO 加盟国が増えることとなった。また日本を含め世界中で同盟の価値がこれまで以上に重要視されてきている。もう一つは、ウクライナの人々の強靭性や忍耐力（resiliency）であり、各国が強靭性を増すために何をすべきか再考する契機となったことである。

"We must continue to deter and have all of these efforts combined" Lt Gen Rupp emphasizes

その中で日本は安全保障上のめざましい前進を遂げている。政府及び防衛のリーダーがアジア及び欧米との交流を促進し、地域のみならず世界的な協力関係の強化を図るとともに、短期間のうちに、いわゆる戦略３文書を策定し、防衛予算を５年間で倍増する方針の下、加速度的に予算措置が進められ、日本の反撃能力の構築、常設統合司令部（PJHQ）の設置などに向け動き始めており、日本及び日米共同への姿勢（posture）はとても前向きな状況にある。米国はこうした日本の方向性にしっかりと協調しつつ支援していくとともに、日本が他のパートナーシップ国とも協力関係を向上させていくことを期待している。

米下院議長の訪台に対する動きなどを見ても中国の脅威は明確であり、日米同盟で抑止力を強化するとともに、他の国々とも協力して更に抑止力を強化していく必要がある。

【米空軍と空自の運用及び共同訓練についての現状】

フリーデル副司令官：　日米同盟関係をより強化して地域の抑止力となることが重要である。米空軍と空自との日々の連携により統合・一体化（integration）を更に進め、同調（synchronization）させていくことでより強固な抑止力が発揮できる。

日米二国間のみならず、他の国々との訓練により同調を図るとともに、もしもの時にはしっかり対応できるという結束力と対処能力を顕示することによって、自由で開かれたインド太平洋地域を維持していく必要がある。米空軍は現在、分散作戦（ACE：Agile Combat Employment）能力の構築を進めているが、この新たな能力についても共に同調し確立していく必要がある。

"One of those key things is the ability to recruit an adequate younger generation" Brig Gen Friedel points out

【日本の防衛能力向上のための焦点】

ラップ司令官：　F-35 や BMD など優れた装備が揃っているが、自らを追い込んでいくような形での訓練を繰り返し、失敗を恐れずに、それらの装備を最大限に活用してみることが重要である。また情報共有の強化も重要である。横田では情報の分析及び共有を日米共同情報分析組織（BIAC: Bilateral Information Analysis Cell）で実施しているが、日米のみならず同志国とも情報共有できるメカニズムがあると良い。例えば、宇宙ドメインについては、日米の協力及び多国間協力を追求すべき分野であると思う。

フリーデル副司令官：　日本は防衛費 GDP1% から 2% となるが、装備品の充実とともに募集（recruit）を強化すべき。米国も同様であるが、募集及び訓練環境を整えることも重要であり、若い世代の獲得及び育成にも投資していく必要がある。

【緊迫状況下における日米間の状況認識（SA）の共有】

フリーデル副司令官：　三沢基地勤務時には、当時の久保田３空団司令と良好な関係を構築し、地域的にはしっかりと情報共有していたが、日本全域においても日米間の状況認識を共有する必要がある。情報をしっかり共有した上で、日米で連携して対処する環境を整えることが重要である。常設統合司令部（PJHQ）が設置されれば、陸海空自衛隊間の、また日米間の統合的な連携もより密接となり、日本防衛のために最も効率的であると言える。

【日本の常設統合司令部（PJHQ)】

ラップ司令官：　常設統合司令部についてはとても難しい問題である。米国は統合して約 40 年になるが未だ模索している状況にある。吉田統幕長にも統合司令部の設置は最難関の仕事の一つとなると申し上げた。常設統合司令部は、人数や場所、組織等は必ずしも重要ではなく、統合司令官にどのような権限が与えられるのか、その権限はどこから移譲されるのか、がポイントとなる。統合司令官に陸海空

各軍種の一部権限が移譲されることとなり、権限を移譲する側は心良しとしないこともあり得る。しかし、権限を与えられた常設統合司令部ができれば指揮命令系統が明確となり、米国及び他の同志国とも更に協調し易くなり、適時適切に発信できるようになる。

【質疑応答】

○円滑な任務遂行のための基地地元住民や自治体に対する方策（相原沖縄支部事務局長）

ラップ司令官： 昨年、周辺地域との交流（community engagement）について、日本に所在する全米軍基地司令官に対し、地域の人々、商工会、教育関係者等との関係強化に関する指示を発出した。地域との良好な関係構築は、基地幹部のみならず、軍人家族を含め基地在住者全体に関わることである。先日の沖縄嘉手納ではオープンベースで約７万人の来場があったが、嘉手納基地司令官から結果報告の電話があり、何人もの住民から話しかけられ、「あなたは他の人から聞いていたほど怖くないね」と言われたとのこと。要は、政治やメディアからの発信内容だけでなく、バランス良く地域の人々の声をきちんと取り込む必要があると感じた次第である。

Mr. Aihara, deputy director of JAAGA Okinawa branch, asks about US Forces' engagement to enhance relationships with local communities

○地域との関係に関し、先任下士官等に求めること（相原沖縄副支部長）

ラップ司令官： 先任下士官シンポジウムを実施し、日本からも統幕及び３自衛隊から部隊レベルの各先任の参加を得た。先任には、指揮官の考えを若い隊員に周知徹底するために何が必要か、何をすべきかを考える必要がある旨話した。

○ OB に対する要望（相原沖縄副支部長）

ラップ司令官： OB は大使（Ambassador）であり頼りにしている。最新情報を OB に提供するので、OB の皆さんには、それを活用して各コミュニティにおける基地と地域との関係強化を後押ししてほしい。

フリーデル副司令官： 地域に出て行って OB の経験をシェアしてほしい。OB には経験があり、辛いこともあったと思うが、前向き（positive）な経験をシェアすることにより若者の募集にも繋がることとなる。

○ F22 の巡回駐留に鑑みたレディネスの維持（永岩会員）

ラップ司令官： F22 の巡回駐留部隊（rotation forces）については６か月毎にローテーション配備しているが、巡回部隊は沖縄到着時には即座に任務可能な状態にある。嘉手納における将来の態勢は未だ発表されていないが、当面は６ヶ月の戦闘機部隊のローテーション配備を継続することとなる。巡回駐留は本国での任務や訓練等を実施する関係上、部隊側にとっても大きな負担となるが、如何にこの地域を重視しているかの表れであると考えている。南西域における適切な抑止体制（appropriate deterrence posture）について議論しているところである。

Lt Gen(Ret.)Nagaiwa asks how to maintain appropriate combat readiness of US Forces in Japan with rotating forces in Okinawa

○日米の募集の違い、募集のアイデアや助言（小野田会員）

ラップ司令官： 募集は従前より難しいものであり、時々の軍の置かれた立場や経済環境等によって波がある。しかし、例えば宇宙軍の募集については最先端の技術を駆使する分野であり、若い世代にとっては従来分野よりも魅力的であり募集上の課題は少ないと思う。

Lt Gen(Ret.) Onoda asks for tips and suggestions about the recruitment of young generation

フリーデル副司令官： 既に個々の考え方が概成している大学生や高校生に募集の働き掛けをするのはお勧めしない。中学から高校入学の頃の若者に対する働きかけが良いと思っている。その際、「一般世間ではできないことを軍ではできる」ということを伝えると良いと思う。米軍では、若い将官が募集成績の低調な地域を２ヶ所回って募集支援を行うプログラムがある。また、米国では学校に進路相談者（Guidance Counselor）を置くシステムがあり、日本にも同様の制度があるならばそうしたカウンセラーを活用するのが効率的であると思う。

終わりに当たり、丸茂新会長より、示唆に富む数々の話に感謝するとともに、最も印象に残ったこととして「統合のために各軍種が一部権限を委譲すること」及び「募集」に関することが挙げられ、「募集」については現役にとっても大いに参考になる内容であることなどが述べられた。

Commemorative photo after the panel discussion concluded

その後、ラップ司令官とフリーデル副司令官は、聴講者の盛大な拍手に送られてパネル・ディスカッションは幕を閉じた。 （太田理事記）

令和５年度 JAAGA 懇親会

JAAGA Annual Reception held on May 16 2023

総会、講演会に続き、懇親会が 18 時 15 分から 19 時 45 分まで会場を変えて行われた。出席者は 141 名であった。

冒頭、丸茂新会長は次のように挨拶された。

Greeting from President Marumo

「コロナ禍が落ち着き、４年ぶりのこの懇親会を、このように盛大に開くことができました。今日はたくさんの JAAGA 会員、現役自衛官、米軍の方々にこの場に来場いただいています。そしてぜひご紹介させていただきたいのは、昨年度の JAAGA AWARD 受賞者の吉田准尉ご夫妻、岩崎２曹をこの席にお迎えしていることです。

Opening of the long-awaited reception in pre-COVID 19 traditional style

昨今の世界情勢を見ますと、力による一方的な現状変更で国際秩序を無視した行為が行なわれています。そういった中で、日米同盟はますます重要なものとなってきております。JAAGA といたしましても、この良好で強固な関係に少しでも貢献できるように尽力してまいりたいと思っております。我々の活動の最も大事なこと、それは現職の自衛官、そして米空軍の方々をお支えすることだと思っております」

ついで、航空幕僚副長、小笠原空将の祝辞があった。「現在、幕僚長がイタリア空軍 100 周年行事に参加しています。

Lt Gen Ogasawara, Vice Chief of Staff, Koku-Jieitai gives an impressive speech as a guest of honor

航空自衛隊では最近、オーストラリア、イギリス、ドイツ、インド、フィリピン等、各国空軍と交流を深めています。また、同時に日米共同による抑止効果を向上させることが、ますます重要になってきています」と各国との連携と日米同盟による抑止効果の向上に取り組んでいることが紹介された。

Brig Gen Friedel delivers heartening congratulatory speech as a guest of honor

第５空軍、副司令官 Friedel 准将は、「過去２年間、私は三沢で司令官をしていましたが、その際、JAAGA と杉山会長から、優秀隊員を表彰していただきましたこと、感謝しております。自由というものは、普段改めてそれに感謝するものではありませんが、護らなければ失ってしまいます。ここにご出席の総隊副司令官森田空将とは、本当に毎週のようにいろいろな調整を行っております。それら調整を通して日本と米国は本当に良好な関係を築けていると思いました」と祝辞を述べた。

Japanese and American participants mingle freely at the reception

その後、懇談に入ったが、宴席スタイルがコロナ以前のようなアクリル仕切り板を排した立食形式に戻ったこともあって、皆活発に動いて懇談していた。久しぶりの再会である者もいて会場は大いに盛り上がっていた。

Closing remarks of the reception made by Lt Gen (Ret.) Fukue, Vice President of JAAGA

懇親会の締めとして、福江副会長から「ＪＡＡＧＡの活動と日米友好の益々の促進を祝したい」との納杯の辞があって閉会となった。

（竹内理事記）

空幕部長等講演会及び JAAGA 訪米成果報告会

Lecture for JAAGA members on February 15 2023

２月 15 日（水）、グランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」において、つばさ会／ JAAGA 訪米成果報告会（1310 ～ 1350）及び航空幕僚監部防衛部長坂梨弘明空将補による講演会（演題「航空及び宇宙に関わる安全保障の近況について」1400 ～ 1600）が行われ、JAAGA 会員 90 名（正会員 62 名〔役員 36 名含む〕、個人・団体賛助会員 11 名、法人賛助会員 13 社 17 名）が聴講した。

（池田理事記）

つばさ会／JAAGA訪米成果報告

TSUBASAKAI and JAAGA members Participate in ASCC 2022

令和４年９月 15 日～ 24 日にかけて行われたつばさ会／ JAAGA 訪米団の成果が武藤副理事長によって報告された。報告内容は『JAAGA だより』No.63 号に「つばさ会／ JAAGA 令和４年度訪米成果報告」として詳説されている。

Lt Gen (Ret.) Muto, Vice Chairman of JAAGA, reports the fruitful outcome of the visit to the United States

今回の報告内容から、航空・宇宙・サイバー会議 2022（ASCC2022）において米欧州・アフリカ空軍司令官ヘッカー大将（Gen James B. Hecker, commander of USAF in Europe and Air Forces Africa）が行ったスピーチ「ロシアの（ウクライナへの）軍事侵攻への対応」について、航空作戦の教訓として掘り下げた部分の要点を紹介する。

Gen Hecker refers to the lessons learned from the Russian invasion to Ukraine at the ASCC 2022

ロシアとウクライナの戦争における、航空作戦の教訓としてヘッカー大将は次の４点を挙げている。

①ウクライナの IAMD（Integrated Air and Missile Defense、統合防空ミサイル防衛）によりロシアは航空優勢獲得に失敗

②ロシア軍は統合作戦能力が欠落

③ロシアは長距離精密ミサイルが不十分

④相互に航空優勢のない状態での戦闘は、長期化、消耗戦化、一般市民の被害拡大傾向がみられる。

今回の訪米団の成果は、米空軍の最新の動向（組織改革、宇宙軍等）を知ることができたことはもとより、ロシアのウクライナ侵攻の教訓とそのアジア太平洋地域への影響についても考察することができた。

Mr. Sasao asks about the significance of air superiority

【質疑応答】

質問（笹尾氏、個人正会員）：航空優勢の確保が必ずしも重要ではないとのこと。制空権の価値や意味が変わったということか。

Vice Chairman Muto responds to the question

回答：かつては制空権を確保し、その下で陸海軍部隊が行動するという構図でした。しかし、ウクライナ戦争のように現代戦では航空優勢を取りたくても取れず、双方が航空優勢の無い中で、敵の勢力圏外からスタンド・オフ攻撃を行う状況が生起している。台湾海峡を挟んだ武力の衝突が起きた場合には、同様の状況が生起する可能性がある。

（竹内理事記）

講演「航空及び宇宙に関わる安全保障の近況について」

航空幕僚監部防衛部長 坂梨 弘明　空将補

～ 坂梨空将補プロフィール～

防大 37 期（管理学科）　職種：情報通信

主要経歴　国家安全保障局（NSS）企画官、
統幕Ｊ５防衛調整官、空幕情報通信課長、
北部航空警戒管制団司令、
航空自衛隊幹部学校副校長、
空幕防衛部長（令和３年 12 月～）

1　戦略３文書策定について

(1) 戦略３文書体系の概要

昨年新たな戦略３文書が策定され閣議決定された。戦後最も厳しくかつ複雑な安全保障環境に見合った形に防衛諸政策の体系が見直されたということ。我が国の防衛政策の大きな転換点であり、大きな予算規模ということもあって日々緊張感を持って職務に取組んでいる。

(2) 戦略３文書策定に係る議論の背景

我が国を含む国際社会はこれまでにない深刻な挑戦を受け、新たな危機に突入したといえる。現実に強力な軍事能力を持つ国が他国に脅威を直接及ぼす事態も起きており、これまでの戦う能力と戦い方を抜本的に転換して強化を図っていかなければならない。特に「スタンド・オフ防衛能力」については、昨今の弾道ミサイルの高度化・運用能力向上を踏まえるとミサイル防衛という手段だけでは完全な対応は困難であり、必要最小限度の自衛の措置として、相手領域における反撃能力を保持することによってミサイル攻撃そのものを抑止するというもの。反撃能力としては、スタンドオフ防衛能力を活用していく。

2　次期戦闘機開発 (GCAP: Global Combat Air Program)

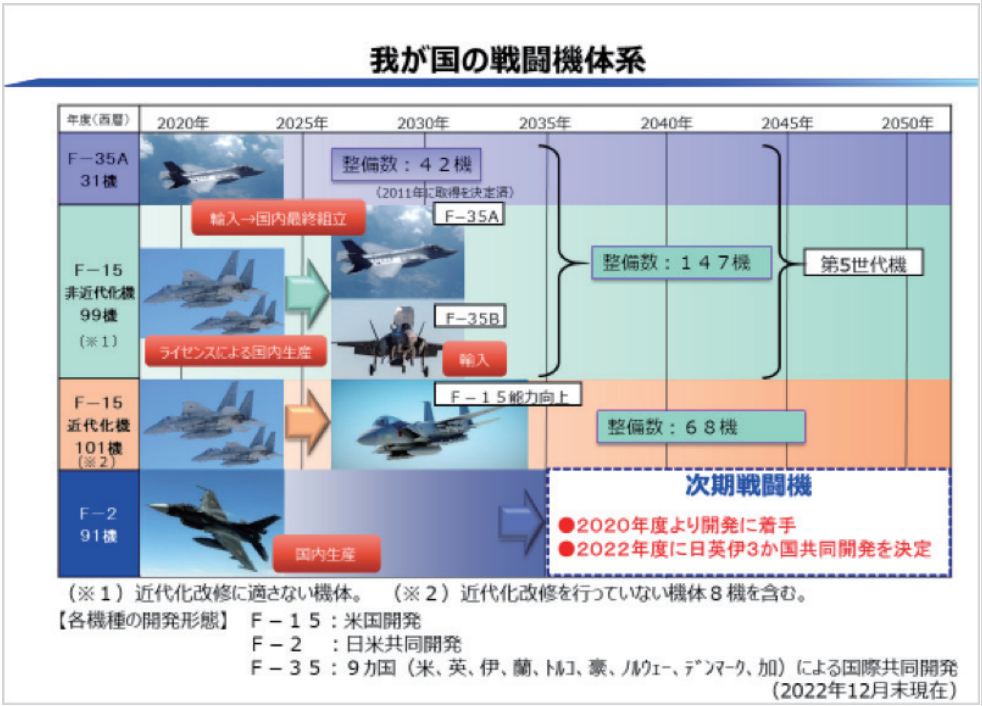
昨今、紛争が国際化、情報化されてきて戦争の形が変わってきており、一方国内の状況も大きく変化し少子高齢化や技術の進展などがある。これらの安全保障環境の大きな変化に対応する努力として、次期戦闘機開発や宇宙領域施策、防衛交流その他の様々な取り組みの在り方の変化があり、相互に関連していると認識している。

(1) 我が国の戦闘機体系

航空自衛隊の戦闘機体系について下表により説明。

(2) 次期戦闘機開発の重視事項等

防衛省の重視事項として、①将来の航空優勢確保に必要な能力 ②十分な拡張性 ③改修の自由 ④国内維持整備基盤の確保（改修、能力向上、高い可動率、即応性の向上）があり、コンセプトとして ①将来ネットワーク化した空対空戦闘の中核となる役割を果たす ② 2035 年以降の脅威に対抗するため、F-X、F-35 及び F-15 能力向上機の３機種それぞれの特性を活かしたベスト・ミックスの運用を考えている。



(3) 国際協力の状況

次期戦闘機に係る国際協力については、2022 年１月からエンジンについて日英両国で共同で実証事業を開始し、併せてサブシステムレベルでの協力について協議を実施していたところ、同年５月の日英首脳会談において、将来の

戦闘機プログラムに係る日英の協力に関し、同盟国等とも連携しつつ、年末までに協力の全体像について合意することで一致した。英国の次期戦闘機事業のパートナー国であるイタリアも参加し、機体の共通化の程度に係る共同分析を含めて協力の可能性を協議した結果、2022 年 12 月 9 日、日英伊首脳が共同で次期戦闘機を開発する事業を「グローバル戦闘航空プログラム（GCAP）」として公表する運びとなった。当初は、この次期戦闘機開発事業を「F-X」と呼んでいたが、現在は「GCAP」と呼んでいる。

米国とは、2022 年 5 月の日米防衛相会談において、オースティン国防長官から日英協力の進展に歓迎の意が示され、次期戦闘機との連携も想定される UAV の開発について、日米協力の可能性を探っていくことで一致した。次期戦闘機とのインターオペラビリティの確保に係る日米の共同検討は、継続している。

(4) 開発費等

戦闘機の開発経費及び量産単価については未定であるものの、費用については 3 か国で分担していくということなので、この共同開発ということがプラスに働くものと思う。開発リスクの低減についても国際協力関係の構築によってより技術的な成果が見込めることと、モデルベースデザイン（コンピューター上のモデルを用いた設計や検証を繰り返すことにより、製造段階で技術リスクが顕在化することを限定できるもの）を活用することでリスクの低減を図っていきたい。

Maj Gen Hiroaki Sakanashi,Director General, Defense Planning and Policy Department gives a lecture for JAAGA members

3 宇宙領域の進捗

(1) 宇宙領域態勢整備の目的・目標・手段

航空領域と宇宙領域では大きな本質の違いがある。①宇宙領域には、領域防衛をするという概念が存在しない。領域の所有権自体が存在しないので、存在するアセットの防衛ということになる。②人工衛星など宇宙空間に存在するものは、基本的に航空領域を飛行する航空機と違って自由に航行できず地球の周りを周回するのみ。

これらのことから、宇宙領域を活用する目的・目標の達成、領域横断作戦の実現すなわち自衛隊の任務保証がなされることが大切であり、また妨害されないようにすることが重要である。宇宙空間は誰のものでもなく国際共有空間であるという性格から、宇宙に係る活動は自ずと国際的な繋がりを要するので、宇宙領域での活動を通じて国際安全保障環境を改善していくことにも繋がる。また、宇宙活動はどこの国でもできるというものではなく、経済安全保障の観点からも国内宇宙産業の発展を期すということが必要となってくる。そういった目的の中で「宇宙空間の安定的利用」を期し、「宇宙利用の優位性を確保する」という目標が掲げられる。そこで空自にどのような能力が求められるかということについては、まず重要な「宇宙領域把握（SDA：Space Domain Awareness）」能力と宇宙での活動を「守る」能力等ということになる。そして、その手段として「SSA(Space Situational Awarness) システム」「レーザー測距装置」「宇宙設置型光学望遠鏡」「衛星妨害状況把握装置」などがある。

(2) 宇宙領域に係る態勢整備

宇宙領域に係る態勢整備について概要説明

(3) SSA から SDA へ

これまでは、関係機関、諸外国等からの情報を使用して宇宙デブリの位置や軌道を把握する「宇宙状況把握（SSA）」を実施してきたが、それらを含めて更に衛星妨害状況把握装置や宇宙設置型光学望遠鏡などを使い宇宙作戦センターにおいて宇宙作戦を遂行していく「宇宙領域把握（SDA）」を行っていく。

(4) 宇宙領域専門部隊の組織体制の強化

宇宙領域専門部隊の体制強化のため宇宙作戦群を改編し、約 120 名体制から令和 5 年度末には約 200 名体制に増員し、令和 9 年度までには将官を指揮官とする宇宙領域専門部隊を新編する。

(5) 宇宙分野の日米協力

日米の協力関係として、まず一つは自衛隊と米軍の宇宙協力の深化と日米防衛当局間での議論を行う枠組みとして「日米宇宙協力ワーキング・グループ（SCWG：Space Cooperation Working Group）」があり、様々な包括的な議論を行っている。もう一つは「宇宙状況把握（SSA）協力」ということで交換公文（E/N: Exchange of Notes）、及び SSA に係る役務の提供及び情報共有に係る了解覚書（MOU: Memorandum of Understanding）に基づき米国側から SSA 情報の提供を受けている。令和 5 年度からは航空宇宙作戦群が SSA システムの運用を開始し情報の相互共有を実施していく予定。次に既に米宇宙コマンド（USSPACECOM）に空自から連絡官を派遣しているが、その派遣により、①日米の宇宙領域における連携の強化・実効性の向上②防衛省の宇宙運用体制構築に資する先進的な知見の獲得③派遣を通じた宇宙領域に係る人材の育成などが期待できる。最後に米軍で実施される教育課程（「Space100」等）への参加や米国講師招聘による国内教育により宇宙全般の知見を習得させている。

(6) 宇宙分野の米国以外との協力

米軍が主催する宇宙分野における机上演習「シュリーバー演習（Schriever Wargame）」、「グローバル・センチネル演習」に参加し、米国以外の他国との交流を実施しており、SSA 情報に関して米国以外にも英、豪、仏等の国との情報共有に向けて協議をしている。

(7) 二国間・多国間連携における宇宙作戦群の役割

宇宙作戦群の持つ日本独自のセンサーでの直接観測では、日本周辺を中心とした低軌道帯及び静止軌道帯をカバーすることができる。集めた SSA 情報を同志国と共有することにより、「宇宙空間の安定的な利用」や「宇宙利用の優位性確保」などに貢献できる。

(8) 民間との協力（SSA 情報の提供等）

2023 年度から防衛省による地上レーダー及び運用システムを本格的に運用開始するが、それに併せて民間の衛星運用事業者との SSA 情報を共有する取り組みを実施していく。

(9) 今後の課題

SSA システムの本格的な運用開始に向けては、「部隊運用の態勢の確立」、「人的資源・人材確保」、「部外機関との連携強化」が必要となってくる。

JAAGA audience listens carefully to his impassioned lecture

また、宇宙関連事業自体も変化しており、以前は各国がしのぎを削って開拓する様なセンシティブなものであったが、昨今は商業宇宙活動（イーロン・マスク氏のスペース X 社などの打ち上げ着陸技術開発、ジェフ・ベゾス氏の Amazon 社の個人宇宙旅行企画、多数の通信衛星を低高度広範囲に打ち上げて世界中でアクセスできる事業推進など）が盛んであり、SSA が社会インフラ化民間ベースの STM（Space Traffic Management）に移行する可能性もあるが、同時にサイバー領域も含めて宇宙領域では衛星を破壊するミサイルや様々な妨害をする能力を構築する国が存在する。

4　防衛協力（トピックス）

ウクライナ侵攻情勢に鑑みても今後の危機が国際化することが見込まれる中で、防衛交流の在り方も一層踏み込んだ形で実施している。

(1) 日独戦闘機共同訓練（ラピッド・パシフィック）

令和 4 年 9 月にドイツの戦闘機が直接飛来し、空自百里基地に着陸した。飛来した戦闘機の翼上には日の丸が描かれており、ドイツ空軍のトップであるゲルハルツ空軍総監が自ら操縦し、シンガポールから空中給油を繰り返しながら日本上空に達した。その後富士山周辺上空で空幕長が搭乗する F-2 編隊が会合してお迎えし、上空で交話もしつつエスコートし百里基地に着陸した。引き続き日独部隊間で共同訓練を実施し、市ヶ谷では改めて空幕長表敬、共同記者会見が行われ、更に皇居周辺で空幕長と独空軍総監が一緒にジョギングをするなど深い防衛交流がなされた。

(2) 米宇宙軍作戦部長来日

米宇宙軍作戦部長レイモンド大将が令和 4 年 10 月に来日し、空幕長に表敬し航空総隊及び宇宙作戦群をご視察いただき、隊員に講話もしていただいた。また、JAAGA との面談で旧交を温めた。

(3) 伊空軍アカデミー学生来日、日伊部隊間交流

令和 4 年 10 月にイタリア空軍のトップ、ゴレッティ空軍参謀長が 83 名のイタリア空軍アカデミーの学生と共に浜松基地と防衛大学校を研修した。イタリアとの間も防衛交流が深化しているところである。また、翌 11 月にはイタリアのプラティカ・ディ・マーレ空軍基地において空自の KC-767 部隊が伊空軍 KC-767 運用部隊と交流し、情報共有や意見交換を実施した。

(4) 空自 F-15 フィリピン派遣（部隊間交流）

令和 4 年 12 月に空自の F-15 戦闘機部隊がフィリピンに親善訪問し、戦後初めての東南アジア地域への戦闘機派遣となった。各種専門分野の隊員の交流を実施し、空幕長の現地視察時、比空軍指揮官と共に部隊視察し共同記者会見も実施した。

(5) 日印戦闘機共同訓練（Veer Guardian）

令和 5 年 1 月にインド空軍の Su-30MKI 戦闘機が空自百里基地に飛来して、要撃戦闘訓練や相互目標情報提供訓練などを実施し、VIP メディアデイにはインド空軍西部方面司令官パンカジ・モーハン・シンハ中将が来日し、空自の坂本中部航空方面隊司令官と共同記者会見に臨んだ。

(6) 日米共同訓練

毎月のように日米共同訓練が実施され、多くの航空機が参加して訓練を実施した。航空機も戦闘機だけではなく救難機や輸送機でも実施しており、訓練空域も日本周辺やアラスカ、グァム、ハワイなど日米共同が質量ともに進化してきている状況である。

Large audience of JAAGA members welcomes the guest speaker

5　様々な取り組み

(1) 女性自衛官の活躍

2015 年 11 月、戦闘機等を含む航空自衛隊の全ての職

種において女性自衛官の配置制限が解除され現在に至っており、職種別の割合や管理職に就く割合も増えてきている。少子高齢化ということもあり隊員募集に注力しているところ、女性を有力な戦力として引き続き勤務させている。

(2) 遠隔整備

新たな試みとして、整備スキルの向上という観点から遠隔地からの整備指導を実施している。現地にいる整備員に対して、装着したカメラ越しの状況を遠隔地のスキル上位の者にリアルタイムで送ることによってアドバイスをもらいながら整備できるという整備法で、例えばオーストラリアで整備していても日本から指導ができるというもので整備レベルの向上が図れる。

(3) 気候変動への取り組み

・電動式航空機用牽引車（電動タグ）の活用

航空機の牽引に電動式の車を使うことによって CO2 排出を抑制しようというもので、順次各基地に展開していく。

・SAF 燃料使用

政府専用機が岸田総理のカンボジア訪問に際し、持続可能な航空燃料である SAF（Sustainable Aviation Fuel）を初めて使用した。今後順次適用機種を拡大していく。

6 航空宇宙防衛に係るトピック

(1)「航空優勢」の現代的意義

現代において「航空優勢」とは何か、どういった意義があるかというのを考えてみたい。テキスト的には「航空優勢とは、我が航空戦力が空において敵航空戦力よりも優勢であり、敵から大きな妨害を受けることなく諸作戦を遂行することができる状態」と説明できるが、今やミサイルの射程も非常に長くなってきており、第５世代戦闘機のようなステルス戦闘機、多種多様な無人機（早い、遅い、静止して漂うなど）が出てきているなど、空における行動の自由度が増しているため、コントロールするのが非常に難しく複雑化している。ウクライナも航空優勢を確保していないにもかかわらず無人機を使ってロシア戦車部隊を撃退できたりと「ケースバイケース」で考えるのが現状の戦争であって、航空優勢の状況が局地に散在して入り混じっていることにもなり得ることから、作戦遂行は良く考えなければならない。

(2) 無人アセット（ゲームチャンジャー）

無人機にも多くの種類があり、技術的に分類すると「遠隔で操縦するもの」と「自動的自立的に操縦するもの」の２つに分けられる。「自動的自立的に操縦するもの」の中で最も古いものは第２次世界大戦中にドイツ軍が使った「V1 ロケット」であり、自動でロンドン上空に飛行して落下し爆発するというもの。このように判断しないものについて、作るのは比較的簡単である。これに AI を搭載するなどして自分で判断させるということをやらせた途端に難しくなる。無人機と言っても多種多様で空を飛ぶ・水中を進む・陸を車で進むなどの運用形態で省人化をしたり、人間の生理的限界を克服した運用ができたりする。また、一定のスキルのものを多く複製できるので戦力の造成が格段に速くなり、経費の低減を図ることもできる。また、超高々度、超高速、超低速、超長時間等の運用が可能であり、ジェット機のように基地が要らないということもある。更に組み合わせて、有人機と無人機、無人機同士、親無人機と子無人機という運用変化があり、戦力造成の在り方も変えて民生品を改良することによって開発を一気に短期間化するなど、様々な変化に対応するにはあり方などを一つ一つ丁寧に解きほぐしていくことが必要と思っている。

【質疑応答】

Some JAAGA members ask questions during the question and answer session

Q1：防衛費が上がる状況にあるが、自衛官の処遇改善は考えているか？

A1：人事教育サイドで総合的に検討している。予算が増えることにより業務が過多にならないよう、良くヒアリングして最適化していくことも考えている。

Q2：「統合司令部」を作るとのことだが、米軍との共同について如何に考えるか？

A2：常設の統合司令部ができれば米軍とは一層密に連携ができるだろう。日米共同の実効性の向上に向けた方向性は日米で揃っていると思う。

Q3：戦略３文書で示された計画等を実行性もって遂行するにあたり空自の課題は如何に？

A3：まず予算規模が従前より大きいこともあって、より一層緊張感を持って確実な執行をしていくということを思っている。これ自体簡単なタスクではないと感じているが、コンプライアンスを確保しながら適正に執行していく。また、業務の抜本的な効率化も図らねばならないと感じており、要所で発想の転換をしていくことを考えている。

（池田理事記）

令和４年度日米優秀隊員表彰

JAAGA AWARD for Koku-Jieitai & USAF Brilliant Soldier in FY2022

令和４年度 JAAGA 日米隊員表彰式が、令和５年２月初旬～３月上旬にかけて那覇、三沢及び横田の各基地において行われた。本表彰行事は、空自と米空軍の友好親善と相互理解に貢献した隊員を表彰することを目的として、平成 10 年度から開始されたものであり、今回が 25 回目となる。これまでの被表彰者数は総計 181 名(空自 106 名、米空軍 75 名)を数えた。また今年度は、コロナ対策を実施しつつ、３年ぶりに各基地で対面形式の表彰式が実施できた。

今年度の日米被表彰者８名は 14 ページに掲載のとおり。

（深瀬理事記）

沖縄地区表彰式

Okinawa area（Naha AB）

２月２日（木）、令和４年度沖縄地区 JAAGA 表彰行事が航空自衛隊那覇基地で実施された。

Okinawa area JAAGA award ceremony at Naha AB on February 2, 2023, attended by servicemembers including high-ranking officers from Koku-Jieitai and USAF

那覇基地における表彰行事は、杉山会長を主催者とし、基地講堂において航空自衛隊の隊員約 50 名、JAAGA 那覇支部から丸野支部長が参列したほか、第９航空団司令兼那覇基地司令高石景太郎空将補、南西航空方面隊司令部総務部長大石和浩１等空佐、受賞者夫人同席のもとで執り行われた。嘉手納基地からは、第 18 航空団副司令官ロナルド・ショッケンマイヤー大佐（Col Ronald Scochenmaier)、第 18 航空団第 18 施設群司令官　ジャスティン・モリソン大佐 (Col Justin Morrison)、第 18 施設中隊先任上級下士官リー・スタンレー最上級曹長 (CMSgt Lee Stanley)、受賞者夫人が同席された。

Award from JAAGA President Sugiyama to Koku-Jieitai MSgt Aiba

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、南西航空方面隊司令部防衛部運用課 相葉圭吾１等空曹で、嘉手納基地連絡調整官付として各種業務の効率化及び円滑化に貢献し、武器弾薬整備特技を活かした日米共同対処能力の向上に尽力するなどの功績が高く評価されての表彰となった。

Award from JAAGA President Sugiyama to USAF TSgt Sternberg

また、米空軍側被表彰者は、第 18 航空団第 18 施設群第 18 施設中隊マイケル・スターンバーグ２等軍曹（TSgt Michael Sternberg,18th Civil Engineer Squadron, 18th Civil Engineer Group, 18th Wing, Kadena Air Base）で、地域における航空自衛隊や他軍種と共同した飛行場復旧訓練を企画するなどの功績が高く評価されての表彰となった。

表彰式は、南西航空音楽隊による日米国歌の演奏から始まり、続く杉山会長の挨拶では、平素の我が国の安全保障への貢献に対する日米両部隊への感謝、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に那覇基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。挨拶に続き、杉山会長から日米の被表彰者に表彰状と記念楯が授与されるとともに、被表彰者の功績が讃えられた。

その後、航空自衛隊代表の高石基地司令と米空軍代表のショッケンマイヤー副司令官から祝辞があり、日米両国の協調がこの地域の安定と繁栄に寄与していること、そして航空自衛隊と米空軍との間の絆強化の重要性、被表彰者の活動が仲間意識と団結を強化していることなど、被表彰者へのお祝いと敬意の言葉を述べられた。

祝賀会は、高石基地司令の挨拶、丸野支部長の乾杯から始まり、日米出席者が終始和気藹々と受賞者を称える温かな雰囲気の祝賀会となった。最後に、南西航空方面隊司令部総務部長大石１佐の納杯で締め括られた。

本行事にあたり、ご尽力いただいた那覇基地、嘉手納基地のスタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

（渡邊理事記）

関東地区表彰式
Kanto area（Yokota AB）

３月３日（金）、令和４年度関東地区 JAAGA 表彰行事が空自横田基地会議室において実施された。

横田における表彰行事は、出席者や会場など様々な制約もあって祝賀会食は取りやめとなり、表彰式のみとなった。表彰式は、主催者である杉山会長、JAAGA 理事３名のほか、航空自衛隊から横田基地司令 石井浩之１等空佐、総隊司令部総務課長泉俊光１等空佐、作戦システム運用隊通電隊長上羽一広２等空佐、同じく准曹士先任小倉亜矢准空尉、宇宙作戦群指揮所運用隊長 佐藤則広２等空佐をはじめ約 20 名が、米空軍からは第 374 輸送航空団司令アンドリュー・L・ラダン大佐（Col Andrew L. Roddan）、第 374 任務支援群整備即応中隊長チャールズ･A･コフマン中佐（Lt Col Charles A. Coffman）が参加した。

今年度の米空軍側の被表彰者は、第 374 任務支援群整備即応中隊のマツェッラ少佐（Major Lance A. Mazzella, 374th AW）であり、日米間の空輸に関する新たな取り極めの作成や日米友好祭など横田基地や地域社会を支援する各種イベントへの支援などの功績が高く評価されての受賞となった。

Kanto area JAAGA award ceremony at Yokota AB on March 3, 2023, attended by servicemembers including high-ranking officers from Koku-Jieitai and USAF

また、航空自衛隊側被表彰者は、横田基地から航空総隊司令部総務課阿部恵子２等空曹、作戦システム運用隊通信電子隊吉田敏准空尉の２名、府中基地から宇宙作戦群指揮所運用隊岩﨑浩治２等空曹の計３名であった。阿部２曹は、国外訓練及びそれに伴う事前調整会議等への参加「藍の会」交流行事へのボランティア支援や日米交流行事への積極的な参加などの功績が、吉田准尉は、准曹会役員及び会長として米空軍横田基地が主催する各種行事等への積極的な参画などの功績が、岩崎２曹は、宇宙作戦群の一員として米統合宇宙コマンド及び在日米軍との実務者レベルでの各種調整や公私にわたる積極的な日米交流などの功績が、それぞれ高く評価されての受賞となった。

Award from JAAGA President Sugiyama to USAF Maj Mazzella

表彰式は日米両国家演奏から開始され、米国国歌の終盤で CD トラブルが発生したが、司会を務めた金古理事の「君が代独唱」という素晴らしい機転によってその後の式次第を滞りなく終えることができた。

Award from JAAGA President Sugiyama to Koku-Jieitai TSgt Abe

杉山会長の挨拶では、冒頭その機転に関するコメントがウィットに富んだ表現で述べられたのち、国際環境が急激に厳しさを増し日米同盟の重要性益々重要になる中で黙々と任務を果たしている日米両部隊への敬意と感謝、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝の言葉、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に横田基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。挨拶に続いて杉山会長から日米の被表彰者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。記念楯授与の際、被表彰者から一言ずつコメントがあり、受賞の感激と支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、今後の抱負などが述べられた。中には思わず言葉に詰まる被受賞者や英語で堂々とコメントを述べる被受賞者もいて、改めて本表彰の重みを感じた。

Award from JAAGA President Sugiyama to Koku-Jieitai WO Yoshida with his spouse

Award from JAAGA President Sugiyama to Koku-Jieitai TSgt Iwasaki

来賓祝辞においては、石井基地司令から「横田基地に部隊が移動して 10 年余、時を重ねるごとに日米の関係は深くなった」という認識とともに、日米の関係強化に貢献した受賞者たちへの賛辞が述べられた。また、ラダン団司令からは、受賞者の功績について「インド太平洋地域を守る為に他に類を見ない重要な役割を担っている」との称賛とともに、表彰式に関して「このような素晴らしい人材を祝うために参加していただいた皆様にも深謝いたします」との謝意が述べられた。

本行事の開催にあたって多大なるご尽力をいただいた日米横田基地及び府中基地の関係各位に対して心から感謝申し上げます。（深瀬理事記）

三沢地区表彰式
Misawa area（Misawa AB）

２月７日（火）、令和４年度三沢地区 JAAGA 表彰行事が三沢基地米空軍ミサワクラブ（NCO クラブ）において実施された。

Misawa area JAAGA award ceremony at Misawa AB on February 7, 2023, attended by local association members and servicemembers including high-ranking officers from Koku-Jieitai and USAF

三沢における表彰行事は、主催者となる杉山会長、池添三沢支部長、山本三沢支部事務局長をはじめ JAAGA メンバー５名のほか、航空自衛隊から北部航空方面隊司令官 安藤忠治空将、第３航空団司令兼三沢基地司令 大嶋善勝空将補をはじめ約 40 名が、米空軍から第 35 戦闘航空団副司令官 ティモシー・マーフィー大佐（Col Timothy Murphy）、第 35 戦闘航空団医療群先任　スティーブン・クリーク最上級曹長 (CMSgt Steven Creek) をはじめ約 20 名が出席された。また、三沢市防衛協会会長 相場 博氏はじめ三沢基地周辺協力団体の皆様のご臨席を賜り、総勢約 70 名が参加する盛大な式典となった。

今年度の米空軍側被表彰者は、第 35 戦闘航空団第 35 装備準備隊のアシュレイ・ワイヤー３等軍曹（SSgt Ashley J.Wyer）であり、日本初の無人偵察機 RQ-4B グローバルホークの導入促進や航空自衛隊員への技術指導のための輸送展開準備コースの設置などの功績が高く評価されての受賞となった。

また、航空自衛隊側被表彰者は、第３航空団司令部 阿部誠治３等空曹であり、空自初の日米実爆訓練における綿密な調整や日米地位協定に基づく一時使用施設の立ち入り点検及び維持補修に係る業務などで積極的に貢献した功績が高く評価されての受賞となった。

表彰式は、北部航空音楽隊による日米両国歌の演奏から始まり、冒頭の杉山会長の挨拶では、国際環境が急激に厳しさを増し日米同盟の重要性益々重要になる中で、黙々と任務を果たしている日米両部隊への敬意と感謝、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に三沢基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。

挨拶に続いて杉山会長から日米の被表彰者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。

Award from JAAGA President Sugiyama to USAF SSgt Wyer with her spouse

来賓祝辞においては、大嶋基地司令から、被表彰者に対するお祝いと感謝の言葉とともに、「三沢基地は日米運用部隊が同じ地に所在するという得難い環境にある。今回表彰されたお二人を模範とし、今後もより一層強固な友情を築いてまいりたい」旨の決意が述べられた。また、マーフィー副司令官からは、二人の被表彰者の功績に対する賞賛と受賞に対する祝意、そして、本表彰式を主催した JAAGA 関係者と平素から友情を育んでいる空自三沢基地隊員に対する謝意が述べられた。

Award from JAAGA President Sugiyama to Koku-Jieitai SSgt Abe with his spouse

表彰式後の祝賀会食においては、三沢つばさ会会長 山本方之氏の乾杯のご発声で和やかな食事会が始まり、三沢基地における活発な日米交流行事の話題などで会話が盛り上がった。会食の終盤には日米の被表彰者から挨拶があり、緊張した面持ちで、今回の受賞を光栄に思うこと、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も日米の友好関係強化につながる活動を続けていきたいとの抱負が述べられた。

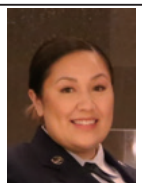
会食の最後は、JAAGA 三沢支部長 池添孝史氏による英語のスピーチと納杯のご発声で締めくくられ、すべての行事が盛会のうちに終了した。

本行事の開催にあたって多大なるご尽力をいただいた日米三沢基地の関係各位に対して心から感謝申し上げます。

（深瀬理事記）

あさがお
作：宇山　OB

受賞者及び功績の概要　JAAGA AWARD 2021 Recipients and their Achievements

	部隊	受賞者	功績の概要
航空自衛隊 Koku-Jieitai	南西航空方面隊司令部（那覇）Naha	 MSgt AIBA Keigo １等空曹　相葉　圭吾	航空自衛隊と米空軍との共同訓練に際し、日米相互運用性に大きく寄与するとともに、特に嘉手納連絡調整官付として各種業務の効率化及び円滑化に貢献し、武器弾薬整備特技を活かした日米共同対処能力の向上に尽力 As the JASDF Liaison to Kadena Air Base, he has particularly contributed to improve efficiency and facilitate various operations. His remarkable efforts include enhancing Bilateral Response Capabilities by showing his outstanding specialty in Weapons and Munitions.
	第３航空団（三沢）Misawa	 SSgt ABE Seiji ３等空曹　阿部　誠治	空自初の日米実爆訓練における綿密な調整や日米地位協定に基づく一時使用施設の立ち入り点検及び維持補修に係る業務などにより航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He made close coordination with U.S. Air Force to conduct the bilateral live bomb exercise which was the first time for Koku-Jieitai. He also put a great effort into on-site inspection, maintenance and repair of temporary use facilities based on Japan-U.S. Status of Forces Agreement.
	航空総隊司令部（横田）Yokota	 TSgt ABE Keiko ２等空曹　阿部恵子	国外訓練及びそれに伴う事前調整会議等への参加　「藍の会」交流行事へのボランティア支援　日米交流行事への参加などにより　航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 She made great efforts to take part in overseas training and coordination meetings. She was also very committed to Japan-U.S. exchange programs and put forth great effort volunteering for ‘Ai no Kai’.
	作戦システム運用隊（横田）Yokota	 WO YOSHIDA Satoshi 准空尉　吉田　敏	准曹会役員及び会長として米空軍横田基地が主催する各種行事等への積極的な参画などにより、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He took part in multiple events organized by Yokota Air Base, the U.S. Air Force, and as an Officer and Chairman of the Yokota Senior NCO Association.
	宇宙作戦群（府中）Fuchu	 TSgt IWASAKI Kouji ２等空曹　岩﨑　浩治	宇宙作戦群の一員として米統合宇宙コマンド及び在日米軍との実務者レベルでの各種調整や公私にわたる積極的な日米交流などにより　航空自衛隊と米軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He made working level close coordination with United States Space Command and United States Forces Japan as a member of Space Operation Group. He took part in Japan-U.S. exchange programs, actively both at work and in private.
米空軍 USAF	18th Civil Engineer Group, 18th Wing（嘉手納）Kadena	 TSgt Michael Sternberg ２等軍曹　マイケル・スターンバーグ	沖縄地域における航空自衛隊や他軍種と共同した飛行場被害復旧訓練を企画するなど、航空自衛隊と米空軍との友好親善および相互理解の増進に献身的に尽力 His remarkable efforts include arranging Airfield Damage Repair Training with Koku-Jieitai and other military services in Okinawa. Also, he has made great success in strengthening our friendship and mutual understanding between USAF and Koku-Jieitai.
	35th Fighter Wing（三沢）Misawa	 SSgt Ashley J.Wyer ３等軍曹　アシュレイ Ｊ ワイヤー	日本初の無人偵察機 RQ-4B グローバルホークの導入促進や航空自衛隊員への技術指導のための輸送展開準備コースの設置などにより、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 She expedited the bed-down of the Japan’s first RQ-4B Global Hawk surveillance drone and organized a Cargo Deployment Preparation course to instruct Koku-Jieitai members on the proper techniques.
	374th Air Lift Wing（横田）Yokota	 Major Lance A. Mazzella 少佐　ランス Ａ マツェッラ	日米間の空輸に関する新たな取り決めの作成や日米友好祭など横田基地や地域社会を支援する各種イベントへの支援などにより、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He advanced Japan and United States logistics operations by authoring a new Airlift Sharing implementing Arrangement. He also sustained the Yokota Air Base Friendship Festival and other multiple events to support the Yokota Air Base and the local community.

コープ・ノース 23 参加隊員を激励

JAAGA cheers Koku-Jieitai Participants in Cope North 23

JAAGA Chairman Maehara call on Lt Gen Uchikura, Commander of Air Deffense Command in Yokota AB on February 6

JAAGA Chairman Maehara call on Lt Gen Morikawa, Commander of Air Support Command in Fuchu AB on February 6

航空自衛隊は、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化に資するため、コープ・ノース 23（Cope North23：CN23）における日米豪共同訓練を実施した。

JAAGA 前原理事長（山田理事及び福永理事同行）は、2 月 6 日（月）に横田基地に航空総隊司令官内倉浩昭空将（副司令官森田雄博空将及び幕僚長佐川詳二空将補同席）、府中基地に航空支援集団司令官森川龍介空将（副司令官川波清明空将補及び幕僚長佐川浩彦 1 等空佐）を訪問し、CN23 における「日米豪の共同訓練」及び「人道支援・災害救援活動に係る共同訓練」に参加している航空総隊及び航空支援集団の参加部隊への激励品の目録を両司令官に手交し、訓練の成功を祈念した。

懇談においては両司令官の「本訓練においては、新たな取り組みも盛り沢山で充実した訓練になる」等のお話から、参加する隊員たちが躍動する姿を感じ取ることができた。前原理事長から両司令官に日頃の JAAGA の活動へのご理解とご支援に感謝の言葉が伝えられた。

激励品は、翌日グアムに送られて内倉航空総隊司令官及び川波航空支援集団副司令官からそれぞれ参加部隊に手交された。

（福永理事記）

寄稿　コープ・ノース23に参加して

訓練実施部隊指揮官
第 9 航空団飛行群司令　1 等空佐　稲留　智

JAAGA 会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のことと存じます。

Col Inatome Commander of Koku-Jieitai team of CN23（right）gets the gift from JAAGA by Lt Gen Uchikura Commander of Air Defense Command（left）

コープ・ノース 23 は 1 月 23 日から 3 月 4 日の間でアメリカ合衆国グアム島米空軍アンダーセン基地を中心に同北マリアナ諸島などを含めた空・地域で実施され、第 8 及び第 9 航空団、航空戦術教導団、航空救難団、警戒航空団、第 1、第 2 及び第 3 輸送航空隊、航空保安管制群、航空気象群、航空機動衛生隊が参加しました。参加規模は、航空機 17 機、人員約 500 名となりました。昨年度までは、航空支援集団所属の参加部隊は航空支援集団訓練統制官の下で訓練に参加しておりましたが、今年度は、全ての参加部隊が航空総隊司令官の指揮の下、一つの訓練実施部隊として参加する形をとりました。このため、航空自衛隊として、いつもにも増して一体感のある活動ができたと感じたところです。参加部隊は、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化に資することを目的に、日米豪共同訓練により、部隊の戦術技量、日米共同対処能力及び参加国間の相互運

用性を向上させ、人道支援・災害救援教導訓練により、アメリカ合衆国、豪州、フランスなどとの連携要領を向上させました。中でも、航空自衛隊として初めてとなる訓練として、戦闘機を海外の民間空港（グアム国際空港及びテニアン国際空港）に展開させ、機動分散運用に資する能力を向上させたほか、警備犬を海外の警備訓練に参加させ、共同警備能力を向上させることができました。

参加隊員は、新型コロナウイルス感染症への必要な対策を行いつつも、各国軍人との交流も積極的に行い、隊員レベルにおいても強い信頼関係を構築できたと確信しております。

JAAGA の皆様から賜りましたご厚志は、訓練開始当初に訓練視察のためにグアムに来訪した航空総隊司令官及び航空支援集団副司令官から直接頂戴いたしました。このため、訓練実施期間中は、日本の味が大きな励みとなり、日本への恋しさを覚えることなく訓練に集中することができましたこと、訓練参加者を代表し心より御礼申し上げます。訓練参加者は、全国各地の原隊に復帰し、それぞれの任地において、この訓練で得た教訓を大いに活かして日々の訓練に臨み、厳しい任務を全うし得る部隊の育成に励む所存です。

末筆ではございますが、JAAGA 会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、お礼の挨拶とさせていただきます。

寄稿　コープ・ノース23に参加して

空中輸送機訓練隊長

第１輸送航空隊 飛行群 第 404 飛行隊 飛行班長　３等空佐　平野 行康

JAAGA 会員の皆様におかれましては、梅雨の候お変わりなくご活躍のこととお喜び申し上げます。平素から航空自衛隊に対する格別のご支援、ご協力ありがとうございます。また、コープ・ノース 23 への参加にあたり皆様からの激励に深く感謝いたします。

我が隊は、グアムからの帰国後、トルコ共和国における国際緊急援助活動において KC-767 による輸送任務を実施し、次の共同訓練参加のための準備に勤しんでいるところです。以下に、コープ・ノース 23 において第１輸送航空隊所属機が参加した訓練概要及び成果をお伝えします。

今回は、ロシアのウクライナ侵攻後一回目となるコープ・ノース 23 となり、訓練空域が拡大され、より多くの国が参加するなど例年に増して熱量が感じられ、参加隊員はシナリオが具体的にイメージでき状況に入り易い精神状態でした。天候は訓練機が代替飛行場へ指向するなど、この時期にしては雨が多いように思われました。

Koku-Jieitai C-130 refuels Roman Tmetuchl International Airport in Palau

まず、輸送機訓練隊（C-130H）においては、今演習で最重要視された Agile Combat Employment（迅速な戦闘運用に関する米軍の作戦コンセプトのシナリオ）において、Mobility Air Force の活動に参加し、想定状況に応じ変化する輸送所要に臨機に対処するとともに、悪天候やフライトプランのシステム上の不具合等の障害を克服しグアム島周辺諸島に点在する空港へ当該所要を輸送しました。また、即応機動能力について、不整地離着陸及び Engine Running On/Off load を行った他、航空医療搬送、戦術空輸、物料投下等をそれぞれ米空軍と密接に連携し訓練することにより各種能力を向上させました。

Patient air transport training at Andersen AFB

空中給油訓練隊（KC-767）においては、空自戦闘機に対する空中給油を行いました。国内では大規模の訓練で、空中給油機が回避機動を行える広い空域を確保することは難しいですが、地理的制約がほとんどなく、実戦的な電子戦環境下において脅威からの回避を演練するなど非常に効果的な訓練となりました。

余暇においては、TANKER TASK FORCE のメンバーとプライベートな交流においてお互いの文化やマナーを相互に理解しあえ、大変感動的な時間を過ごすことができました。

両訓練隊のいずれも、本邦では計画困難な訓練を行い、共同作戦能力を向上するとともに人的交流も大いに成され信頼関係が強化されました。

このように、大変効果的な訓練を経験できたのも、米空軍の空自発足当初からの支援と協力、および JAAGA 会員の皆様が国際環境及び日米安全保障関係に対する日本国民感情の変遷期における両軍信頼関係の維持・強化のための活動を継続し築いた土台あってのことと再認識し、感謝の念が沸き上がっております。

元在日米軍司令官兼第５空軍司令官のシュナイダー中将が 2019 年に JAAGA 主催講演会において「自由で開かれたインド・太平洋地域を達成、維持すると同時に北東アジアにおける安全保障の課題に対処することの重要性を強調するとともに実戦的な訓練を行える場がコープ・ノース等多国間演習である」と述べられました。今回そのコープ・ノースに参加し米軍基地で米軍のオペレーションの一部を目の当たりにし、安全保障の課題をクリアするために空自が米軍から学ぶべきことはたくさんあると体感しました。一例として、私が参加したフライトで、上空における米空軍の空中給油機の軌道や交信要領は我々のものと異なる部分がありました。そういった運用の違いを米空軍のファイターウェポン・オフィサー等教官から学ぶことができれば、共同作戦能力を更に向上させるとともに、必要な能力を獲得または発展させることができると思いました。また、将来両国空軍が今以上に力を発揮できるようにするためには、これまで空自が獲得し磨き上げてきた作戦遂行能力に加えて、その基盤となる教育分野に、米空軍の持つ KNOW-HOW を取り入れることが有効であるのではないかと思料するものであります。

最後に、重ねて JAAGA 会員の皆様の我々現役隊員への日頃からのご支援に感謝しますとともに、ご健康・ご多幸を祈念いたしまして私の所感を結ばせていただきたいと思います。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申しあげます。

「コープ・ノース 23 における日米豪共同訓練の概要」　（空幕報道発表資料抜粋）

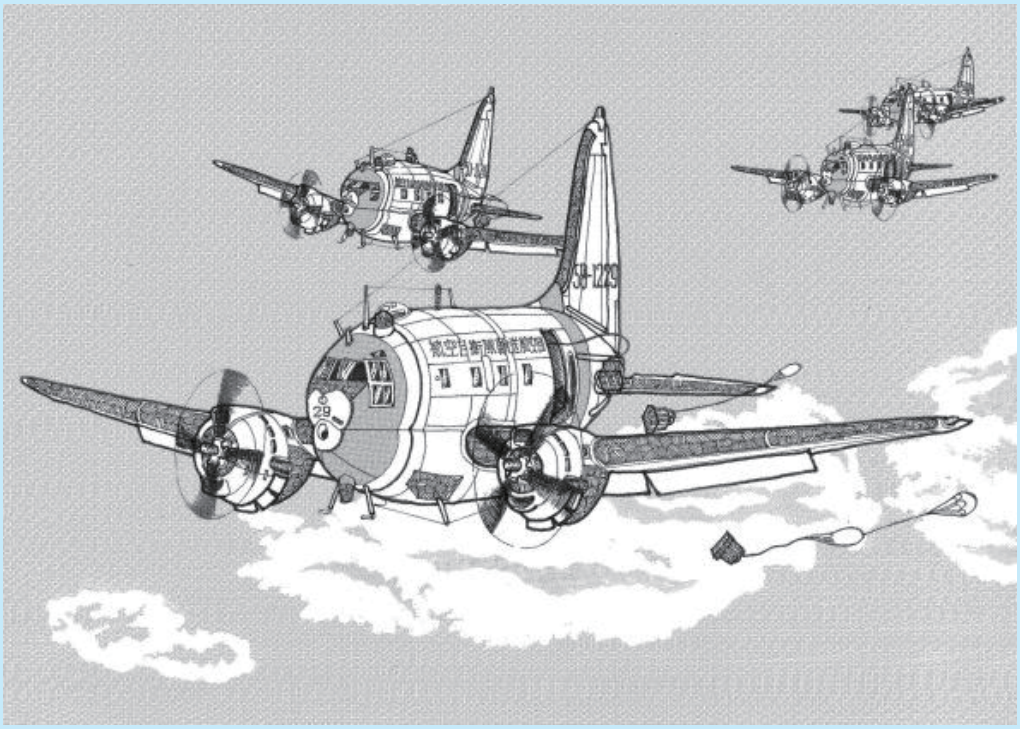
目的：日米豪の共同訓練を実施し、実戦的訓練環境の下、部隊の戦術技量、日米共同対処能力及び参加国間の相互運用性の向上を図る。また、日米豪の３カ国にフランス及びカナダも加えて人道支援・災害救援活動に係る共同訓練を実施し、部隊 の能力及び参加国間の連携要領の向上を図る。

期間：令和５年１月 23 日 (月) ～同年３月４日 (土) (訓練期間 : 令和５年２月８日 (水) ～同年２月 24 日 (金))

場所：(1) アメリカ合衆国グアム島 (2) アメリカ合衆国北マリアナ諸島 (3) 前２号に規定する場所の周辺空域 (4) パラオ共和国ロマン・トメトゥチェル国際空港 (5) 海上自衛隊硫黄島航空基地

主要参加部隊等：第８航空団 (築城)、第９航空団 (那覇)、航空戦術教導団 (百里等)、航空救難団 (入間等)、警戒航空団 (浜松)、第１輸送航空隊 (小牧)、第２輸送航空隊 (入間)、第３輸送航空隊 (美保)、航空保安管制群 (府中)、航空気象群 (府中) 及び航空機動衛生隊 (小牧)、F-15J/DJ×6 機、F-2A/B×6 機、UH-60J×1 機、E-767×1 機、K/C-130H×2 機及び KC-767×1 機 (人員約 500 名)

主要訓練項目：防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練、空対地爆撃訓練、捜索救難訓練、戦術空輸訓練、物料投下訓練、即応機動訓練、警備訓練、滑走路被害復旧訓練及び航空医療搬送訓練



"MILK ON-BOARD "

USAF TACHIKAWA Air Base からの飛行

作：富岡幹博 会員

※「空自 C-46 輸送機による初の災害派遣における物量投下のイメージ」

"MILK ON-BOARD" の由来を 35 ページ下段コラムに解説していますのでご覧下さい

令和４年度 JAAGA 三沢基地等研修

JAAGA members' Visit to Misawa AB on February 21 and 22, 2023

JAAGA Study Tour members with Col Timothy B. Murphy, Vice Commander of 35th Fighter Wing in front of F-16

【全般】　２月 21 日及び 22 日の２日間、米軍三沢基地等研修を実施し、基地及び所在部隊の任務、主要装備品等についての理解を深めるとともに、日米指揮官等との懇談等を通じて緊密な日米連携の現状、その重要性を深く認識できた。研修団には、団長として森本益夫氏（正会員）、副団長として小出栄一氏（個人賛助会員）及び内田浩氏（法人賛助会員）を迎え、研修員として正会員３名、賛助会員 22 名（法人 11 名、団体２名、個人９名）及び随行理事として５名（荒木、今瀬、大岩、岩崎及び太田）が参加した。また、種々の事前調整等に尽力頂いた JAAGA 三沢支部池添孝史支部長及び山本親男事務局長が現地で研修に合流した。本研修にあたり、日米双方の強いリーダーシップの下、関係部隊等の心温まる受入、きめ細やかな管理支援等を頂いた関係者の皆様に心より感謝を申し上げたい。

【研修第１日目】

＜入間基地集合・結団式＞

参加者は、入間基地稲荷山門前にて受付を行い、中部警戒管制団（以下「中警団」という。）の車両輸送支援を得て入間基地空輸ターミナルに移動、輸送機への搭乗手続き及び結団式に臨んだ。搭乗手続きの間、研修団長及び副団長は、中部航空方面隊（以下「中空」という。）副司令官佐藤信知空将補、中警団副司令山川篤史１等空佐及び第２輸送航空隊（以下「２輸空隊」という。）司令太田将史１等空佐との懇談に臨んだ。令和４年末に策定された戦略３文書の実現に向けた取り組みや１月の北大西洋条約機構（NATO）ストルテンベルグ事務総長への対応などが話題に上った。その後、空輸待合所において結団式を行い、団長及び副団長の自己紹介、研修にあたっての抱負等を含めた挨拶に続き、同行理事の紹介、参加者一人ひとりの紹介があり、最後に研修にあたっての管理事項等が伝えられた。

Tour Leader Morimoto talks about current defense issues with Maj Gen Sato, Vice Commander of Central Air Defense Force

＜ C-1 輸送機に搭乗、三沢基地へ＞

晴れわたる空のもと、佐藤中空副司令官、山川中警団副司令及び太田２輸空隊司令の見送りを受け、航空自衛隊のベテラン輸送機（順次退役しており貴重な搭乗機会となる）C -1 に搭乗し、三沢基地へと飛び立った。飛行間、機長・クルーのご配慮により、操縦席の見学、飛行経路や現在地の説明を受けつつ、次第に雪景色に変わって行く景色を空から堪能した。

Col Murphy and CMSgt Steven Creek, Acting Command Chief of 35th Fighter Wing welcome Tour members at snow-covered apron

三沢基地に着陸して目にした光景は、辺り一面雪、白一色であり、施設部隊が懸命に除雪をしているというものであった。降機し、滑って転倒しないように気を配りつつ駐機場を出ると、第 35 戦闘航空団（以下「35 航空団」という。）副司令官ティモシー・マーフィー大佐（Col Timothy B. Murphy, Vice Commander of 35th Fighter Wing）、35 航空団最先任上級曹長代理スティーブン・クリーク上級曹長（CMSgt Steven Creek, Acting Command Chief of 35th Fighter Wing）が満面の笑みを浮かべ出迎えて頂いた。聞けば着陸時間帯のみ天候が良くなったとのことで、研修が始まると雪が降り始め、時折吹雪となった。まさに三沢への着陸は「この時以外にない」といった状況であり、研修団長以下皆さんの日頃の行いのお陰であると感謝した。

＜米空軍三沢基地及び 35 航空団概況説明＞

Col Murphy presents a brief “Outline of Misawa AB”. Tour members understand well with interpretation in Japanese by Mrs. Hasegawa

35 航空団司令官マイケル・リチャード大佐（Col Michael P. Richard, Commander of 35th Fighter Wing）は、コープ・ノース参加により不在であったため、マーフィー副司令官が米軍三沢基地及び 35 航空団に関してブリーフィングを実施された。都度、Mrs. Hasegawa により日本語通訳されたことで、研修者の理解は大いに深まった。基地の沿革、所在部隊の状況、日本人従業員等も含め 1 万人近い人員が所在する現況などが話されたが、特に、”Joint / Combined Community Team” － 米海軍、米陸軍、航空自衛隊、三沢市、防衛省と一体化したチームとして基地を運営し、地域社会との良好な関係を維持することを重視していることが強調された。また、同団所属の F-16 の主任務は、敵防空網の制圧（SEAD：Suppression of Enemy Air Defenses）であり、その重要性を再認識するとともに、その重要な任務に就く者としての誇りが感じられた。質疑応答においては、米空軍が取り組んでいる ”ACE”（Agile Combat Employment：a proactive and reactive operational scheme of maneuver executed within threat timelines to increase survivability while generating combat power「戦闘力を発揮しつつ、残存性を高めるために敵脅威下で機動する、能動的かつ受動的な運用〔太田仮訳〕」）の現状や問題点、空自部隊との連携や共同訓練の状況などについて質疑応答がなされた。

＜ F-16 及び搭載装備等見学＞

格納庫内に、F-16 戦闘機、搭乗員の装着する救命装備、F-16 に搭載する兵器類の 3 つの展示が行われ、それぞれ専門特技員により説明が行われた。研修者の疑問にも丁寧な回答・対応があり、機体の説明を担当したパイロットからは、ワイルド・ウィーゼル（Wild Weasel：最先鋒の SEAD 任務を課される部隊や航空機の通称で「野生のイタチ」の意）の気概が感じられた。

Feeling "Wild Weasel"

＜「レイクビュー」における昼食＞

格納庫から小川原湖畔にあるレストラン「レイクビュー」までの間は、米空軍のバスに乗車し、基地施設等を車窓から見学した。降雪と強い風によりホワイトアウト気味となり、時折、走っている道路の先さえ見え難い状況ではあったが、基地の広大さ、福利厚生の充実度合いを実感した。小川原湖の雪景色を楽しみながら、アメリカンスタイルの昼食を頂いた（それにしてもポテトの量は半端ではない…）。

＜エンジン整備施設見学＞

F-16 に搭載されている F-110 エンジン（空自 F-2 にも搭載）の試験運転を見学した。アフターバーナーまで使用する試験運転であり、研修者はサイレンサー内のエンジン直近でこれまで経験したことのない轟音と空気の振動を体験し、小型ではあるがハイパワーを生み出す戦闘機用エンジンの凄さを実感した。

Jet engine test throughout Full Afterburner

＜米軍三沢病院研修＞

第 35 医療群司令ジョン・コットン大佐（Col John J. Cotton, Commander of 35th Medical Group）から、三沢病院の概要説明を受けた。1 次医療機関であり、高度の医療が施せる状況ではないが、近隣の部外医療機関ともしっかり連携できているとのことであった。また、有事の際には 10,000 人程度の患者に対し緊急的な対応ができ、そのために 3 カ月ごとに施設・設備を稼働させ訓練を実施して

いるとのことであった。次に病院内を巡り、各診療科の特徴などについて説明を受けた。その中で、三沢、横田、横須賀、岩国及び嘉手納にある各米軍病院では、将来米国において医師を目指す日本人若手医師を受け入れているとの話があり、実際に三沢病院で働いている３名と対面し、直接話を聴く機会も作って頂いた。このプログラムは米国で医師を目指す人達には有名であり、大いに活用されているとのことであった。

Col John J. Cotton, Commander of 35th Medical Group leads “Hospital Tour”

＜JAAGA 主催夕食懇親会＞

18 時から米軍 MISAWA CLUB において開催された。JAAGA 主催夕食会には、空自からは北部航空方面隊（以下「北空」という。）司令官安藤忠司空将、第３航空団（以下「3 空団」という。）司令兼三沢基地司令大嶋善勝空将補、北部航空警戒管制団副司令河田喜嗣１等空佐、第６高射群司令（現北部高射群司令）原田一樹１等空佐、北部航空施設隊司令荒田真一１等空佐などの主要幹部及び３空団准曹士先任楢崎勇一准空尉、35 航空団からはマーフィー副司令官、ポンパ作戦群司令（Col Doyle A. Pompa）、コットン医療群司令及びクリーク最先任上級曹長代理が参加した。

↑Opening Remarks by Tour Leader Morimoto
↓8 tables with Koku-Jieitai and USAF guests

30 分程のソーシャル・タイムで参加者同士の話の輪は広がり打ち解けた雰囲気の中、夕食会が開始された。参加者は８個のテーブルに分かれて席に着き、まず岩崎理事から JAAGA の沿革や活動について日本語及び英語での紹介があった。続いて、森本団長から歓迎の挨拶があり、厳しい世界情勢の中で日米の連携が益々重要視される中、三沢基地においてその連携が大いに深化していることに敬意を表するとともに「三沢基地勤務の経験はないが、充実した移動訓練の思い出、夜間、街に出撃した楽しい想い出」などが披露された。安藤北空司令官からは、夕食会への招待及び日頃の JAAGA の支援に対する感謝が、マーフィー副司令官からも日頃の JAAGA の活動への感謝、日米の主要幹部が集う機会であり有意義な時間としたいとのお話があった。大嶋基地司令からは、明日の空自研修で更に三沢基地について理解を深めていいただきたいとのお話があり、乾杯のご発声を頂いた。

各テーブルでは「アメリカ」を感じる豪華な夕食に舌鼓を打ちながら、研修時のエピソードや感想などを交えながら色々な話題で会話に花が咲いた。空自紹介ビデオも放映される等、楽しい時間は瞬く間に過ぎ終宴となったが、研修員は日米主要幹部と直接話ができ、その人となりに触れられたことに感激するとともに、研修員相互の親睦を深められたことに大いに満足の様子であった。

【研修第２日目】

＜三沢基地概要説明＞

安藤北空司令官、大嶋基地司令が同席する中で、３空団監理部長田中誠２等空佐から、北空の任務、担任防衛区域や行動の概要、特徴等についての説明があった後、三沢基地の沿革や米軍基地の中に所在する基地の特性、米軍及び地元三沢市をはじめとする自治体との三者共存をモットーとする良好な関係維持の現状、空自隊員が米軍人との間で訓練や各種イベント等の交流を積極的に行い日米共同の実を上げている旨、更には、F-35A 戦闘機２個飛行隊を有する部隊として、任務や訓練に邁進しており、特に保全については厳重に守られている等の説明があった。研修員からは、最新鋭の戦闘機である F-35A に関する質問や日米共同での運用に関する質問が多く出され、大嶋基地司令、時には安藤北空司令官からも許される範囲で丁寧に回答を頂いた。

Outline brief about “Northern Air Defense Force and Misawa AB”

＜三沢基地体験喫食＞

幹部食堂に研修団用のスペースを用意して頂き、感染予防のアクリル板を設置の上、事前に配膳もして頂いており、会話は控えめにしつつも三沢基地名物の美味しいスープカレーを堪能した。

＜ F-35A 及び E-2D 見学＞

格納庫内において、F-35A 戦闘機と E-2D 早期警戒機を見学した。研修員は２グループに分かれ、交互に見学を行ったが、どちらも最新の機体とあって研修者の興味は尽きない様子で、機体を間近に見ながらの説明に熱心に耳を傾け、

疑問点はその都度質問し理解を深めていた。

＜解団式＞

すべての研修メニューを終了し、C-1 輸送機にて空路入間基地に戻り、中空司令官坂本浩一空将、中警団司令兼ねて入間基地司令小野打泰子空将補、太田２輸空隊司令の出迎えを受け、しばしの懇談の後、空輸ターミナルにおいて解団式を行った。森本団長からは、研修員の協力により大きな成果を挙げ研修が無事終えられたこと、研修の計画から実行にあたりお世話になった関係部隊や理事への謝辞が述べられるとともに、成果を今後の活動に活かして欲しいとの要望が述べられた。小出副団長からは、これまでの研修では経験していない新たな発見があり有意義であったこと、内田副団長からは、部隊の現場で強い日米連携が実感できたとの所見が述べられた。参加者は、各々の成果を携え、軽い足取りで入間基地を後にした。

研修の準備から実行にあたり、多大なるご支援を頂いた空幕を始め日米受け入れ部隊及び支援部隊関係者に対し、特に米軍研修先の調整や車両手配、引率等でお世話になった 35 航空団司令部の長谷川京子様及び外舘泰明様に対し心から御礼を申し上げたい。

（太田理事記）

Group photo with Lt Gen Ando, Commander of Northern Air Defense Force and Maj Gen Oshima, Commander of 3rd Wing

研修所感　法人賛助会員　日本電気株式会社 宇宙・防衛営業本部 第三防衛営業 第三グループ　山口　功

２月 21 日から１泊２日の日程で令和４年度 JAAGA 三沢基地研修が実施された。私は法人賛助会員の一人として本研修に初参加した。本稿には本研修の所感を著すこととする。

午前７時 30 分に集合に合わせて、集合場所の航空自衛隊入間基地に参加者が続々と集まった。集合後一同は基地内のターミナルへと移動し、そこで結団式が行われた。担当理事殿のスムーズな進行で式は円滑に進み、研修参加者紹介ではそれぞれが簡単な挨拶を述べ、お互いを歓迎し初対面の緊張をほぐすことが出来た。

三沢基地へは C-1 輸送機で移動した。輸送機には初めて搭乗したため、離陸時の音や揺れは非常に迫力があった。また飛行中は機内をじっくり見学することが出来、コックピットも拝見することが出来た。研修参加者も各々機内の様子も写真に収めるなどして空の旅を楽しんだ。９時に入間基地を出発し、10 時過ぎにはあっという間に三沢基地へと到着した。

三沢基地に降り立ちまず目に入ったのは一面の雪景色だ。青森の冬の厳しさは言うまでもないことかもしれないが同じ東北・宮城出身の私から見ても青森の積雪はレベルが数段違うと感じた。広大な滑走路の維持のための除雪も並大抵のものではなく作業にあたる隊員の方々の苦労の一端を感じることが出来た。着陸後、米軍第 35 戦闘航空団副司令マーフィー大佐のお出迎えを受けて一行は米軍司令部に移動した。

米軍司令部へと移動した一行は米軍三沢基地の概況説明を受けた。冒頭にマーフィー大佐が挨拶を行い、スライド資料を用いて米軍三沢基地について 15 分ほどのブリーフィングを行った。とりわけ印象に残っているのは所属する第 35 戦闘航空団のミッションについての話である。不安定な国際情勢にあって、「太平洋勢力の防衛」、「日本の防衛」、「抑止力と存在感の向上」をミッションに挙げ、航空自衛隊と共に国際秩序を守っていくという心強い説明があった。また近隣地域との良好な関係構築を最も重視しており、コロナ禍で制限が続いていたがまた交流を再開していきたいという話も印象的であった。地域との良好な関係、相互理解があってこそ航空団としてのミッションを果たすことが出来るという日ごろの取り組みについて伺い知ることが出来た。

その後、米軍施設の見学として F-16 戦闘機の見学、エンジン整備施設、米軍病院をそれぞれ見学した。F-16 戦闘機については隊員の方々の説明を受けてから、機体はもちろ

ん関連する装備品に触れながら見学することが出来た。間近で見る戦闘機はやはり圧巻で現役パイロットとの記念撮影は良い思い出となった。そのF-16のエンジンを整備する施設の見学では実際にアフターバーナーを起動していただき、その轟音と迫力を間近で体験することが出来た。そしてアフターバーナーを起動したエンジンの前で記念撮影もしていただきまたとない経験をすることが出来た。私を含み参加者もお互いにその迫力に圧倒されたと感想を語りあっていた。続いて米軍病院を見学した。緊急時の簡易ベッド施設の見学やコロナ禍での米軍病院としての取り組みについて説明を受けた。そこでも印象的だったことは地域との良好なパートナシップを重視している点である。米軍病院として6000人の患者対応が可能ではあるが専門診療科が限られており、出来る治療も限られてしまうため、日ごろから近隣の大病院との連携は不可欠であるという側面を知ることが出来た。またコロナ対応では米空軍として最も感染を抑制した基地であるという説明も印象的であった。

1日目の研修を終えて、夜は米軍、空自の幹部隊員を交えての夕食懇親会が実施された。当初は初対面であり、お互い緊張しながら研修に臨んでいたが、1日目の研修を共にしたことでお互いに打ち解けることができ、美味しい料理とお酒を頂きながらさらに親交を深めることが出来た。

2日目は寒さは厳しいながらも晴天に恵まれ、空自側の研修および見学を実施した。
三沢基地および北部航空方面隊の概況説明を受けた。ロシア極東地域におけるスクランブル対応についての説明を通して、北部防空の要として最前線に立って任務を遂行されているということを改めて認識することが出来た。また日本で唯一F-35が配備されている基地ということもあり、運用にまつわる苦労など三沢基地ならではの話を聞くことが出来て大変有意義な機会となった。

概況説明後は三沢基地を周回しながら施設説明を受けつつ、格納庫にてF-35戦闘機とE-2Dの見学を行った。F-35の実物を見るのは初めてであり一番楽しみにしていた研修であった。第一印象は想像よりも機体が大きかったことである。前日にF-16を見学していたためより大きく、迫力を感じた。3空団の隊員によるステルス性能に関する説明などを聞きながらじっくりと機体を見ることが出来た。

そして昼食をはさみ、午後に再びC-1に乗り三沢基地を出発し、入間基地へと戻ってきた。その後、ターミナルにて解団式を実施した。1泊2日の研修も、終わってみればあっという間に時間が過ぎ、たくさんの学びを得ることが出来た。

結びに、本研修を通して昨今の不安定な安全保障環境に対応するためには日米のより一層の連携が不可欠になってくると肌で感じることが出来た。そして研修の様々な場面を通じて、友好親善を図ることができ貴重な経験となった。民間の立場から国家安全保障に寄与出来ることの誇りとその責任を再認識できる研修となった。本研修の企画・実施に尽力いただきました関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

研修所感　法人賛助会員　伊藤忠商事株式会社 航空宇宙部 航空宇宙第２課　八木澤 研人

2月21日から22日の2日間、JAAGA主催での米軍三沢基地研修が実施された。三沢基地の見学は初めての経験であり、米軍及び自衛隊の方々の親切かつ誠意あるご協力により非常に勉強になることが多く、日米各級司令官の方々や研修に参加する企業関係者の方々とも交流ができる貴重な機会であった。

初日は米軍三沢基地研修であり三沢基地までは C-1 で移動した。軍用機に搭乗することも初めての体験であり、非常に有意義な経験であった。

研修は第 35 戦闘航空団司令部での講話にはじまり、F-16 及び F110 エンジンの見学等、実機を見ながら学ぶ機会を頂いた。イヤーマフをつけた F110 エンジンのテスト見学は臨場感あふれるものであり、普段の業務では経験及び学習できない体験ができた。また米軍病院の見学も行い、施設概要や基地内での役割等を伺った。小川原湖畔を臨むレイクビューでの昼食や日米各級司令官を交えた懇親会では様々なお話を伺い、経験の浅い私にも真摯に向き合っていただく姿勢に感銘を受けた。多くの方々と業界に係る話のみならず、ざっくばらんな話もでき非常に有意義な会であった。

2日目は航空自衛隊三沢研修であり、第3航空団司令部からの三沢基地概要説明や、F-35、E-2/Dの見学を行った。北部航空方面隊司令官講話など航空自衛隊としての三沢基地の歴史や有り方を伺う中で航空自衛隊と米軍間の強固なパートナーシップを感じた。

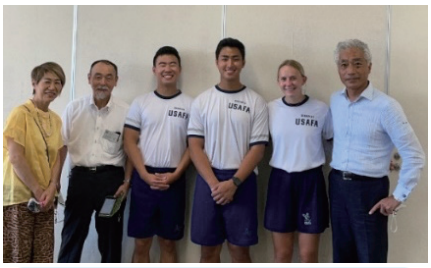
2日間の研修を通じて、地域との強固な友好関係を重んじる姿勢が非常に印象的であった。航空祭や新年会など、地域コミュニティとのかかわりを図るイベントも積極的に開催しており、地域住民を含めた日米間の密接な協力関係を学んだ。実機の見学や直接部隊の方々の話を伺う機会は少なく大変貴重であり、このような機会を頂いたことに深く感謝申し上げます。

米空軍士官学校留学生支援「日光研修」

JAAGA supports USAF Cadets' Nikko Tour on October 29

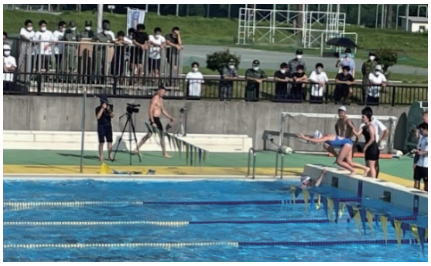
コロナ禍３年目となった今年は、昨年に引き続き米空軍士官学校と防衛大学校のワンセメスター留学生交流が行われ、３学年のブレッド君（Brett Cast）、４学年のキャサリンさん（Catherine Bakke）とベニー君（Benny Chun）３名の留学生が派遣されて来ました。来日時期がコロナ感染第７波のピーク期であったため、水際対策として３名は日本到着後、横須賀海軍基地において４日間滞在したそうです。

今年も昨年に引き続き肥田木夫妻と小職がホストファミリーを務めました。ホストファミリーの委嘱式が当初、８月24日に予定されましたが、防衛大学校でクラスター感染が発生したため中止されました。



Group photo of Cadets and their host family members, JAAGA Director Yoshida (right), Mr. & Mrs. Hidaki (left)

９月５日に、防衛大学校の伝統行事である水泳大会が応援者を制限する形で開催され、久保学校長の計らいでホストファミリーが招待され、ホストファミリー全員が参加しました。大会前に留学生との初めてとなる懇談の機会をアレンジしていただき、留学生と対面することができました。留学生３名は水泳大会にオープン参加し大会を盛り上げていました。



Swimming competition at National Defense Academy

JAAGA の事業である日本文化研修支援（日光研修）は、今年の国体開催県が栃木県であったため宿泊先を確保することができず日帰りとして、10月29日に行いました。留学生は、早朝に防大を出発し、東京駅でホストファミリーと合流。上越新幹線で宇都宮へ向かいました。宇都宮駅では日光研修のスポンサーである個人賛助会員高柳様の長女、堀川典子様とエスコート役を務めてくれる海星女子学院高校の学生３名と佐藤教諭が星条旗と横断幕を掲げて歓迎してくれました。

High school girl students welcome exchange cadets at JR Utsunomiya station

Group photo in front of chartered bus

その場で自己紹介とペアリングを行い、待機している貸切バスに乗り込み、日光へ向かいました。日光では先ず、登録有形文化財に登録されている金谷ホテルのレストランで昼食を取りました。このレストランでは虹鱒１匹そのままのムニエルが有名で、留学生のみならずエスコートである高校生もコース料理を堪能しました。

↑Group photo in front of restaurant
↓Lunch at a restaurant in the Kanaya Hotel

昼食後はホテル各館及び庭を鑑賞しました。その後、徒歩にて日光東照宮へ向かいました。東照宮では、エスコートの高校生が事前に準備してきた資料を片手

In Nikko Toshogu Shrine

に、各種建造物や日本の文化・伝統について一所懸命に説明していました。

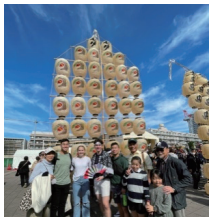
研修後にエスコート役の高校生と米空軍からの留学生の所感文を相互に交換したところ、高校生はコミュニケーションの手段としての英語の必要性を強く感じると共に日本人として自らの歴史や文化にこれまで無関心であったことの反省がありました。また留学生からは日米の同じ世代間での意思疎通が重要であると認識すると共に日本の伝統と文化の素晴らしさを改めて感動したとの感想があり、この日光研修は日米双方に意義あるものであると改めて感じさせられました。

日光東照宮での見学を終え、待機していた貸切バスにて宇都宮駅に戻り、そこでエスコート役の学生と別れました。その後、高柳令夫人、堀川夫妻が主催する歓迎の夕食会が市内のカリフォルニア料理のレストランで催され、海星女子学院から会長及び校長を来賓に迎え、留学生３名とホストファミリーが参加しました。

Dinner arranged by Mrs Takayanagi,Mr. & Mrs. Horikawa

夕食会では、高柳夫妻が米国で飛行機の操縦免許を取得し、自ら操縦して訪れた米国都市の話題や教育現場における男女共学の話題などで盛り上がりました。夕食会後は宇都宮駅から新幹線で東京に戻り、留学生は肥田木夫妻の住むマンションのゲストルームに宿泊しました。

翌 10 月 30 日、留学生は肥田木夫妻宅で朝食を取り、マンション前の上野公園を散策しました。その後、JR で中野駅へ移動し、中野区が主催する『2022 なかの東北応援まつり』を見学しました。天候にも恵まれ、「秋田竿燈まつり」「盛岡さんさ踊り」「山形花笠まつり」「仙台すずめ踊り」「福島わらじまつり」「黒石よされ」など、東京に居ながら東北の祭を堪能してました。



その後、新宿へ移動し、歌舞伎町を散策し、花園神社で酉の市を見学しました。

このように今年の日光研修は例年と異なり日帰りとなりましたが、都内で開催されていた各種のイベントや祭を見学することができ、これまでになく日本の伝統や文化を肌で感じ取ることができたのではないかと思います。

航空自衛隊に理解を深めてもらうため、小野打入間基地司令に依頼し、11 月３日に開催された入間基地航空祭に留学生を招待してもらいました。

Visit Iruma Air Base Weather Squadron

展示されている航空自衛隊の主要な装備品を実地に見学すると共に入間基地所在部隊である気象隊を訪問し、同隊の隊員と懇談する機会を設けました。また、航空祭の会場内で杉山会長と遭遇し、短い時間ではありましたが、会長と留学生の懇談の機会を持つことができました。

Photo with President Sugiyama

留学生は昨年 12 月８日に全ての課程履修を終えましたが、ベニー君は帰国直前にコロナに感染したため、横須賀市内で隔離生活を送り、帰国の途に就きました。

昨年度の留学生であったハイジさん（Heidi Kwock）が士官学校を卒業し、本年３月に嘉手納基地に配属されたと連絡があり、機会を捉え、再会する予定です。留学生の多くが在日米軍基地に配属されることを希望しており、日本の文化・伝統に理解のあるそのような米空軍士官が在日米軍基地で増えることにより、航空自衛隊との連携も円滑・容易になることが期待されます。

コロナにより様々な制約がある中で、ワンセメスター留学生交流事業が行われ、それに対して JAAGA として日本文化研修支援事業を高柳様、堀川様の支援を受けながら実施できたことは大きな意義があったと感じています。引き続き、本件事業が継続することを切に願っています。

（吉田理事記）

かき氷

作：宇山　OB

SPORTEX '22-B

JAAGA holds SPORTX '22-B, JAPAN-U.S. friendship golf athletic meet on October 28

Cherry blossoms welcome “BILATERAL SUPER PLAYERS”

昨年秋の JAAGA ゴルフコンペ「SPORTEX’22-A」の後、「オミクロン株亜種」の爆発的な流行が起こったが、年初からは収まりを見せ、3 月中旬からは「マスク着用は個人判断」とされるまでに落ち着いた。そのような中、3 月 21 日（火）、桜の花が咲き進む多摩ヒルズゴルフコースにおいて「SPORTEX ’22-B」が開催された。「3 年ぶりに」現役空自隊員 19 名の参加も得て、米空軍関係者 14 名と JAAGA 正会員 30 名を合わせた総勢 63 名による「コロナ以前に近い形」でのコンペとなった。

実施にあたっては、引き続き感染の極限を図ることとし、参加者全員が集まる機会は開会式のみとし、競技は 2 組ずつホール分けをする変則のショットガン・スタートで効率的に実施し、喫食や表彰式は実施しない形とされた。

Powerful and humorous remarks cheer up all participants

開会式は、上ノ谷理事の軽妙な司会進行により進められ、福江副会長とレッシュ第 5 空軍司令部参謀長（Col Daniel A. Roesch, 5 AF Chief of Staff）の力強くユーモア溢れる挨拶により、参加者はリラックスするとともに大いに勢い付けられた。その後の競技説明、記念撮影を終えた参加者は、各々のスタート・ホールに向け颯爽とカートを操った。

スタート合図のホーンで各ホール一斉に競技が開始されると、そこかしこで歓声が上がり、熱戦が繰り広げられた。競技結果は、楠瀬さん（現役）が（GRS 86 HDCP 15.6 NET 70.4）優勝、野澤さん（JAAGA 会員）が準優勝（GRS 96 HDCP 25.2 NET 70.8）、バウマン（Patrick Bowman）さん（米空軍）が第 3 位（GRS 71 HDCP 0 NET 71.0）となり、ベストグロスは、JAAGA 側は田母神さん（GRS 81）、米空軍側は NET 第 3 位でもあるバウマンさん（GRS 71）であった。運営側としては、現役空自隊員、JAAGA 会員、米空軍人と全ての参加ソースから表彰対象者が出ることとなり、絶妙な天の采配に感謝した次第である。

参加者からは、ゴルフ談義は勿論のこと色々な話題で盛り上がったとのコメントがあり、このひとときが、日々厳しい任務に当たる日米現役の皆様にとって癒しの時間となり、有意義な交流の機会となったことと確信するとともに、計画・運営に当たった理事各位、特にボランティアとしてプレー抜きで現場調整や臨機の対応、受付や会計、成績集計などを担当して頂いた上ノ谷、井上、大岩の 3 名の理事、また毎回最良の環境を提供して頂いている多摩ヒルズゴルフコースの関係者の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

Open-air Reception beside the Temporary Club House

次回のコンペは秋となるが、コロナ禍が終息し、クラブハウスの改修工事も完了し、「コロナ以前」の形で心置きなく実施されることを期待したい。

（太田理事記）

クラブハウスは
お色直し中 →

日米相互特技訓練を激励支援

JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

JAAGA Chairman Maehara calls on Brig Gen Jesse J. Friedel, Deputy Commander, 5th Air Force in Yokota AB on March 14

３月 14 日（火）、日米相互特技訓練激励のため、前原理事長（山田理事、太田理事同行）が、横田基地に第５空軍副司令官フリーデル准将（Brig Gen Jesse J. Friedel, Deputy Commander, Fifth Air Force）を訪問した。

フリーデル副司令官との懇談には、第５空軍司令部参謀長代理バス退役大佐（Mr. Sam Bass Col (Ret.), Technical Director/ Deputy Chief of staff, HQ Fifth Air Force)、第５空軍最先任上級曹長アイエロ最上級曹長 (CMSgt Shawn Aiello, Command Chief Master Sergeant Fifth Air Force)、第５空軍の軍人相互・支援組織 “Fighting Fifth Booster Club” 代表のタング氏（Ms Stephenie Tang, President, the Fighting Fifth Booster Club)が同席された。

前原理事長からは、多忙な時期での訪問受け入れに対し謝意が述べられ、様々な場面における日米空軍種間の緊密な連携･協力、活躍に対し敬意が表されるとともに、コロナ禍が落着いたことから、JAAGA としても訪米団による AFA（Air Force Association：米空軍協会）との交流深化をはじめ各種事業を推進していく旨が述べられた。

Talking about Importance of Japan-U. S. bilateral NCO Exchange program and further progress in the future

フリーデル副司令官からは、空自と米空軍の関係は継続的に強化され、お互いに心強いパートナーとなっていること、また日頃からの JAAGA の支援に対する謝意が述べられた。前職の三沢基地司令官としての経験を基に、米軍各基地と周辺地域との更なる交流を推進し、日米の国民的な相互理解を深めていきたいとの意向も述べられた。アイエロ最先任上級曹長からは、日米相互特技訓練が非常に重要なプログラムであり、今後益々充実すべきとの話があり、双方の認識が共有された。また、同訓練を支援している “Fighting Fifth Booster Club” 代表のタング氏からは JAAGA からの継続的な支援への感謝が述べられた。

令和４年度の日米相互特技訓練は、コロナ禍の影響と各種訓練の実施状況により、３月 20 日 (月) から 23 日 (木) の横田基地における米空軍受入れ訓練のみとなった。今後、この空自隊員 16 名が参加した訓練の状況や日米参加者の所見等についても紹介したい。

JAAGA Chairman Maehara calls on Col Nomura, Director of Education Office, Air Staff Office and Warrant Officer Ueda, President of “Rengou-Junsoukai” in Ichigaya AB on March 15

３月 15 日（水）、前原理事長（山田理事、太田理事同行）が、航空幕僚監部（以下「空幕」という。）に人事教育部長代理教育室長野村信一１等空佐を訪問し、日米相互特技訓練の激励を実施した。

日米相互特技訓練の激励式は、野村教育室長臨席の下、連合准曹会会長上田順一准空尉が参加され、個人訓練班長片桐美智子１等空佐の司会により厳粛に執り行われた。

前原理事長は、「各種共同訓練で日米の協力・相互理解が深まってきているが、日米相互特技訓練では、お互いの部隊において生活を共にしつつ､正に『フェイス･トゥ･フェイス』での訓練となる。取扱う装備品や器材の違い、業務の実施要領の違いなどを理解し、各自の業務にフィード・バックできる良い機会になることに加え、文化の違いや考え方の違いなどを学べるまたとない機会である。特に、英語力に自信のない隊員には、米空軍人受入れの訓練には積極的に参加してもらいたいと思う。受入側であれば、先輩や同僚の支援が得られるので、英語での意思疎通にチャレンジし易い。そういった形で英語力の必要性を感じ、努力して大きく能力を向上できた者も多く、その後は各種共同訓練への参加機会が増えたという事例も多い。今後とも、空幕にも強力

Encourage “Rengou-Junsoukai” and ASO to support the program strongly

なご支援を頂きながら、JAAGA としてもしっかり支援していきたい」と述べた。

これに対し、上田連合准曹会会長からは、これまでの日米相互特技訓練への JAAGA の支援に対する感謝の念が伝えられるとともに、「引き続き訓練を充実させ、日米の相互理解、共同運用能力の向上に努める」との心強い意気込みが表された。

米空軍担当部署との緊密な連携により、更に充実した訓練が計画・実行されることを期待する。

（太田理事記）

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

飛行開発実験団

Air Development and Test Wing

Maj Micheal Tibbs

初めまして。アメリカ空軍少佐、マイケル・ティブスです。本寄稿では、交換幹部として離任を間近に控えていることもあり、岐阜基地飛行開発実験団に派遣されて以来２年余りを過ごした経験について、私の家族、趣味、軍歴などを交えつつ、ご紹介したいと思います。

Watching the sumo tournament with his family at Nagoya-Basho

私には妻と３人の子供（2歳と4歳の女の子と０歳の男の子）がいます。私と家族は、赴任以来、週末などを利用し、約２年間かけて全47都道府県を訪れ、日本文化を満喫することが出来ました！　中でも、私のお気に入りは現在赴任している岐阜県です。田舎の景色、山々、稲田、そして下呂、高山、郡上八幡、関ケ原、白川郷の文化には目を見張るものがあります。また、京都、名古屋、奈良、大阪などの素晴らしい観光スポットへも容易にアクセスできるのも魅力です。

家族を紹介しますと、日本の料理が大好きな妻とアンパンマン、ポケモン、ドラゴンクエスト、マリオなどが大好きな娘２人で、長女は今、岐阜各務原の幼稚園に通いながら、妻は、岐阜で多くの友人を作り、日本の生活を楽しんでいます。

私はと言うと、家族と過ごす（時間）、飛行機の操縦、スキューバダイビング、ビデオゲーム、日本語とロシア語の勉強が好きなほか、家族同様私も旅行が大好きで、地球上のすべての国を訪れることを妻と一緒に人生の目標としています。

次に私の経歴についてお話します。私はアメリカ合衆国南部の田舎町であるアーカンソー州ロジャーズで生まれました。アメリカンフットボールや陸上競技などのスポーツが大好きな子供でした。最初に日本文化に興味を持ったのは、ドラゴンボールＺや幽☆遊☆白書などのアニメを観たときです。

高校卒業後、私はアメリカ空軍士官学校（USAFA）に入学し、陸上競技の十種競技に参加しながら宇宙工学を専攻しました。私は物事がどのように機能するのかに常に興味を持っていて、物を分解して再度組み立てることが大好きでした。そのため、2013 年に USAFA を卒業して空軍士官になった後、空軍技術研究所（AFIT）で宇宙工学の修士号を取得し、2015 年に国立航空宇宙情報センター（NASIC）にて勤務しました。そこでは、軍事衛星に必要な宇宙技術を決定し、宇宙業務の運用者のための戦術、技術及び機器

の操作手順を開発するために使用する仮想敵に対するモデルリング＆シミュレーションに従事し、宇宙作戦の開発プログラムに貢献することができました。また、同じ時期に飛行機の操縦に興味を持ち、パイロットの免許を取得し、2017 年に飛行試験エンジニア（FTE）として合衆国空軍テストパイロット学校（TPS）への入学が許されました。ここでは、多くの機種に搭乗し、アメリカ空軍の兵器システムについて安全かつ効果的な飛行試験を行う方法を 1 年間学びました。卒業後も私はエドワーズ空軍基地にとどまり、B-1、B-2、B-52 爆撃機の飛行試験に加え、人工知能や極超音速兵器を含むさまざまな飛行試験プログラムに取り組みました。さらに、単発および多発エンジンの航空機の連邦航空局（FAA）フライトインストラクターとして、45 種類の異なる航空機で 700 時間以上の飛行経験を積むとともに、TPS において FTE 学生の指導教官を務めました。

このような勤務をしながらも、2016 年に、新婚旅行で日本を訪れたことがきっかけで、日本と日本語に対する興味を持った私は、いつか交換幹部として日本に赴任したいという希望を抱くようになりました。幸運なことに、私は岐阜基地の飛行開発実験団（ADTW）で航空自衛隊と共に働く機会を得たことから、日本への移住を決め、カリフォルニア州モントレーにある国防言語学校（DLI）において、1 年 6 か月間、日本語を学びました。

現在、私は飛行開発実験団において、交換幹部として、幹部技術課程（TOC）、試験飛行操縦士課程（TPC）の課程教育に参加するとともに、練成訓練において、新しい技術幹部に FTE としての能力を付与する指導に教官として従事しています。

Teaching at the Techinical Officer Course (TOC)

また、F-2 や T-4 に飛実団の試験飛行操縦士と同乗し、日米間の試験手法の相互理解を深めるとともに、F-2 のフラッター試験及び日豪間の空中給油試験等においては、地上での技術的助言に加え、団の機上計測員資格を得て、F-2 等の随伴機等に同乗し、空中での通訳や助言を実施しました。更に奈良基地の幹部候補生学校（OCS）や目黒の幹部学校での指揮幕僚課程（CSC）、幹部普通課程（SOC）、幹部特別課程（AOC）で専門的な軍事教育（PME）を教えるチャンスを得るとともに、日米豪の演習の計画会議に通訳として参加する機会にも恵まれました。

Flying in the F-2

私たち家族は、今年 7 月にアメリカ帰国予定であり、私は空軍長官の奨学金研究員（SECAF STEM Fellow）として、航空生理学、人工知能と最適制御の関係を研究すること、そして、航空宇宙工学の博士号（PhD）を取得するため、マサチューセッツ工科大学（MIT）に入学します。

Flying a C-172 around Mt.FUJI

私は、交換幹部の職務を通じて、日本全国を旅し多くの日本人と出会い、彼らの社会や文化、生き方について多くを学ぶことができました。岐阜での飛行試験の同僚との交流、飲み会での友達作り、旅先での偶然の出会い、そして航空自衛隊の将官たちとの意見交換など、多くの方々から学び、日本とその人々に深い敬意を持つようになりました。私を飛行開発実験団の飛行試験エンジニアの部隊である航空技術隊に歓迎してくださった岐阜基地の同僚や上司の方々に感謝します。この任務は私にとってキャリアの中でも最高かつ、一生忘れることのない貴重な機会でした。また、米日空軍種の交流にご活躍されている日米エアフォース友好協会（JAAGA）については、家族や私の経験を紹介する機会を与えて頂き、ありがとうございました。私たちは未来に向け、アメリカと日本の関係がさらに深まることを信じています。

JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様の投稿を募集しています。投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」（男性にはタイピン、女性にはピンブローチ）を謹呈させていただきます。

JAAGA 広報係

航空自衛隊コーナー
From Koku-Jieitai

「鷹の目」グローバルホーク
"HAWK EYE" Global Hawk

令和４年 12 月 15 日（木）、航空自衛隊は三沢基地に「偵察航空隊」を新編した。同隊は、隊司令吉田昭則１等空佐以下約 130 名の部隊であり、偵察専門部隊として無人航空機 RQ-4B（グローバルホーク）を運用する。
グローバルホークは攻撃能力を持たない純粋な偵察無人機であり、地上からの無線操縦によって約 36 時間連続で飛行し、赤外線カメラを使って高度約２万メートルの上空から画像を撮影し地上に伝送するほか、周辺の電波情報を収集し偵察・監視任務を遂行する。
航空幕僚長井筒俊司空将は、15 日の記者会見で「（グローバルホークは）通常の航空機よりも長い滞空時間が確保でき、集中的な監視活動ができる。今後ノウハウを蓄積し、早期に戦力化していく」と述べた。
防衛省は、12 月 16 日付で「防衛力整備計画」を発表し、今後の防衛力強化に向けて「無人アセット」の導入を更に進める方針であり、三沢基地には現在２機のグローバルホークが配備されているが、更に１機を追加配備し、3 機運用によって日本周辺空域での活動を実施する。（池田理事記）

寄稿　偵察航空隊の新編　～部隊紹介～
Koku-Jieitai Reconnaissance Group is organized at Msawa A.B.

偵察航空隊副司令　１等空佐　飯田　隆

1　はじめに

今回は「JAAGA だより」に偵察航空隊について寄稿できる機会を得て光栄です。
我が隊は、隊司令吉田昭則１等空佐を核心として部隊の早期戦力化に邁進しているところです。今回はその一端を紹介させていただきます 。

Col Yoshida,Commander of Reconnaissance Group makes a speech at the organization completion ceremony

2　部隊の沿革

30 大綱において「我が国から比較的離れた地域での情報収集や事態が緊迫した際の空中での常時継続的な監視を実施し得るよう無人 機部隊を保持すること」が空自の体制に含められ、RQ–4B（以下「グローバルホーク」と記述）を運用する準備部隊として令和３年３月 18 日に航空総隊隷下に臨時偵察航空隊が新編されました。令和４年３月 12 日に最初の機体が三沢基地に到着し、所要の準備を実施し た後、令和４年 12 月 15 日に偵察航空隊が新編されました。令和５年 １月 23 日には多くの来賓等をお招きし、偵察航空隊編成完結記念式典を実施したところです 。

3　編制装備

偵察航空隊は、現在２機のグローバルホークを保有しており、隊司令以下隊本部、第 502 飛行隊及び整備隊からなる部隊です。
グローバルホークは最大航続時間約 36 時間を誇るとともに、電子センサー／赤外線センサー及び合成開口レーダーを装備しており、平素はもとより事態緊迫時等における集中的な監視活動等が可能です。

4　任務及び役割

偵察航空隊は、防衛省初となる無操縦者航空機であるグローバルホークを運用する部隊です。
従来、有人機により実施してきた航空偵察をグローバルホークにより実施し、我が国から比較的離れた地域での情報収集や、事態が緊迫した際の常続的な監視等を行うこと

ができる態勢を構築するもので、これをもって、自衛隊の情報運用体制を強化するとともに、日米の相互運用性を更に強化することが可能と考えています 。

5 部隊運営状況

令和４年３月に機体が納入され、機体の整備や地上統制装置の設置調整等を行いました。これと併行して機体の運航に必要な準備やパイロット、センサー操作員及び整備員の学科教育やシミュレーター 訓練を行い、令和４年 12 月から飛行を開始しています。偵察航空隊は「令和の時代の情報収集のけん引役になる」との使命感と誇りを 胸に、一層奮闘努力し無人機運用のパイオニアとして任務に邁進して参ります。

RQ-4B maintenance crews make Pre-Flight inspection for the night mission

6 今後の課題

偵察航空隊は 、防衛省初となる無操縦者航空機を運用する部隊であるだけではなく、新編間もない部隊でもあります。運用のノウハウを蓄積し、安定的かつ効果的な部隊運用態勢を早期に確立することが課題と考えており、引き続き、日々任務に邁進して参ります 。

偵察航空隊　副司令　１等空佐　飯田　隆

米空軍コーナー

From 5th Air Force

Strike Eagles join Lightning II's at Keystone of the Pacific

https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/3364155/strike-eagles-join-lightning-iis-at-keystone-of-the-pacific/

ノースカロライナ州シーモア・ジョンソン空軍基地第 336 飛行隊の F-15E ストライクイーグルは、嘉手納基地の F-15C/D イーグルの米国への段階的な帰還の間にも継続的な戦闘機の存在を確保するために、2023 年 4 月 8 日に日本の嘉手納基地に到着した。

Airmen assigned to the 4th Fighter Wing at Seymour Johnson Air Force Base, North Carolina

ストライク・イーグルは、太平洋の要衝に展開している間、アイルソン空軍基地から展開している F-35A ライトニング II や嘉手納基地に残る F-15C/D イーグルと連携し、この地域における安定した戦闘機能力を継続的に確保することができる。

Airmen assigned to the 4th Fighter Wing board a Boeing 777 at Seymour Johnson Air Force Base, North Carolina

多様な戦闘機が、統合軍や同盟軍とともに、日本を守るための作戦態勢を強化するとともに、これら戦闘機の存在を通じて、自由で開かれたインド太平洋を確保する。

F-15E は、空対空と空対地の任務を遂行するために設計されたデュアルロールファイターである。アビオニクスとエレクトロニクス・システムにより、低高度、昼夜、全天候で戦うことができる。

F-15E は空対地ミッションのために、空軍の所有するほとんどの兵器を搭載することができる。更に、空対空任務では、AIM-9M サイドワインダーや AIM-120 中距離空対空ミサイル（AMRAAM）で武装することができる。また、"E " モデルには、内部に 20mm 砲が搭載されている。

U.S. Air Force F-15E Strike Eagles assigned to the 336th Fighter Squadron taxi after arriving at Kadena Air Base

第 18 作戦群司令官のヘンリー・シャンツ大佐は、「ストライク・イーグルを太平洋の要衝に迎えることができ、うれしく思っています。F-15E は実績のある戦闘プラットフォームであり、ここ嘉手納にあるすでに強力な航空機の

組み合わせに、いくつかのユニークな能力をもたらすものです」と述べる。

このように嘉手納に先進的な戦闘機を受け入れることで、第 18 航空団は、米国の同盟国の防衛と自由で開かれたインド太平洋を確保するために、強固で信頼できる航空兵力を提供する態勢を維持している。

第 18 航空団は、これらの配備期間中、騒音軽減に関する日本政府との二国間協定を順守し続ける。来日するすべての航空機乗務員は、現地の騒音軽減手順についてブリーフィングを受け、ミッションプランナーは現地の影響を抑えるために十分な配慮を続けていく。

第 18 航空団が嘉手納の F-15 部隊の段階的な帰還を続ける中、国防総省は、より新しく、より高度な航空機を一時的に配備して補充することにより、この地域における安定した戦闘機の存在を維持する。

インド太平洋地域の能力を近代化することは、依然として最重要課題であり、嘉手納でのより高性能な航空機への移行は、日本との同盟の強固な基盤の上に立ちながら、態勢を強化するという国防総省の継続的なコミットメントを例示するものである。

（浅井理事仮訳）

US, Japan leaders gather for 2023 SEL Symposium

https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/3392991/us-japan-leaders-gather-for-2023-sel-symposium/

Attendees of the 2023 Senior Enlisted Leader Symposium pose for a group photo in front of a C-130J Super Hercules at Yokota Air Base

5 月 9 日、横田基地で開催された 2023 年上級下士官シンポジウムには、米軍と自衛隊から 60 名以上が集まり、今年のテーマである "革新的なリーダーとは？" に沿った討論会を行った。

冒頭の挨拶で、在日米軍司令部上級下士官ウェンデル・スナイダー曹長は、米国が中国との競争の激化に直面し続ける中、ジョー・バイデン大統領が「決定的な 10 年」と見なすこの時期に、互いに学び合い、考えることを参加者に促した。

Japan Maritime Self-Defense Force Warrant Officer Hideyuki Seki, Joint Staff Office senior enlisted advisor to the chairman, delivers opening remarks

スナイダーは、「私たちは皆、インド太平洋の安全保障がこの決定的な 10 年の重要な要素になることを理解しています」と述べた。「では、今日この部屋にいる上級下士官リーダーである私たちにとって、それは何を意味するのでしょうか？私たちは、二国間の関係や協力関係を改善し続けることができます。二国間の訓練や相互運用性を向上させ続けることができるのです」と続けた。

在日米軍兼第 5 空軍司令官のリッキー・ラップ中将もイベントで講演し、ウクライナ戦争が、日本に防衛費の増加や、国家安全保障戦略、国家防衛戦略、防衛力増強計画の 3 つの戦略文書の発表などを促したことに触れた。

Attendees learned about landing zone safety officer procedures

ラップ司令官は、「日本はスピード感を持って動いている。中国からの脅威は現実のものであり、その脅威は増大している。これらすべてに対応できるよう、我々も同じスピードで動く準備が必要だ」と述べた。

2023 年上級下士官シンポジウムを通して、参加者は各指揮官から話を聞き、着陸帯安全士官によるデモンストレーションを見学し、兵士が厳格であると同時に環境に左右される中でいかに航空機着陸を支援しているのかを学んだ。

また、日米の同盟意識を強化するため、分科会やチームビルディングの活動にも参加した。

（浅井理事仮訳）

ホリデーレセプションに参加

JAAGA members participate in A Holiday Reception

在日米空軍 / 5 空軍　横田基地
USFJ / 5th AF at Yokota AB in Dec.10 '22

12 月 10 日（土）午後 6 時から米空軍横田基地オフィサーズクラブにおいて在日米軍兼第 5 空軍司令官リッキーラップ中将（Lt Gen Rickey N. Rupp, Commander of U.S. Forces Japan and Fifth Air Force）ご夫妻の主催によるホリデーレセプションが開催された。

JAAGA Directors with Lt Gen Rickey N. Rupp and Mrs.Rupp

クリスマスのイルミネーションで美しくライトアップされたオフィサーズクラブのエントランスからレセプションの会場に入ると主催者のリッキーラップ夫妻が一人一人の招待者を出迎えられ、挨拶と握手を交わし感謝の気持ちが伝えられた。

昨年は、コロナ感染拡大防止の対策（日本政府が関係者に定めている制約に配慮）から「ホリデーコンサート」として開催され、レセプション中はマスク着用で食事の提供はなく、太平洋空軍バンドの演奏を楽しむ企画であった。今年は「WITH コロナ」で制約も緩和されてレセプション中はマスクなし、飲食あり。心ゆくまで会話と飲食と太平洋空軍バンドによるクリスマスソングを楽しむことができた。

レセプションには、山崎統合幕僚長ご夫妻、河野前統合幕僚長、ラーピセートパン駐日タイ王国大使ご夫妻、山川 JAXA 理事長ご夫妻、内倉航空総隊司令官ご夫妻、尾崎情報本部長ご夫妻、西谷補給本部長ご夫妻、森川航空支援集団司令官ご夫妻、森田航空総隊副司令官ご夫妻をはじめとして、たくさんの要人、高級幹部の方々が参加された。また、横田基地周辺の福生、多摩、武蔵村山、相模原、座間などの各市町から首長や協力団体の方が参加され、JAAGA からは武藤副理事長、朝倉理事ご夫妻、藤田理事及び福永理事が参加した。

ラップ司令官から開会にあたり「基地周辺自治体のリーダーの方々、自衛隊、関係機関、団体から多数の御出席をいただきクリスマスのエネルギーを皆様からもらったことに感謝します　今日は太平洋空軍バンドの演奏を楽しんでください」と挨拶があり、和やかな雰囲気の中で会話も弾み参加者の親睦の輪が広がった。

Closing remarks by Lt Gen Rupp

楽しい時間は短く感じられ、バンド演奏でクリスマス気分も大いに盛り上がった頃、閉会にあたりラップ司令官が「日米同盟に対する軍をはじめ関係パートナーの皆様のご支援に感謝する」「Merry Christmas and Happy New Year ！」と結ばれ、お開きとなった。　（福永理事記）

第 18 航空団　嘉手納基地
18th Wing at Kadena AB in Dec.10 '22

12 月 10 日（土）嘉手納基地内ロッカー NCO クラブにおいて、第 18 航空団司令官デイヴィッド S. エグリン准将 (Brig Gen David S. Eglin) 夫妻主催によるウインターソーシャルが開催され、JAAGA 杉山会長及び沖縄支部相原事務局長が参加した。

ウインターソーシャルには、外務省沖縄事務所宮川大使夫妻、沖縄防衛局小野局長、渡久地北谷町長、平田沖縄市副市長等の周辺自治体関係者と共に、地元企業各社代表者等多数の関係者が参加した。今回は、翌日の那覇基地エアーフェスタ開催や各種演習等のため、在沖自衛隊司令官等の参加が叶わなかった。

Brig Gen David S. Eglin, Mrs. Eglin and President Sugiyama

在沖米軍関係者は、海兵隊太平洋基地司令官スティーブン E. リズウスキー少将 (Maj Gen Stephen E. Liszewski)、米陸軍第 10 支援群司令官ネッド C. ホルト大佐 (Col Ned C. Holt)、その他には第 18 航空団最先任上級曹長夫妻や隷下各群司令官等が参加するなか、第 3 海兵隊音楽隊によるクリスマスソングの演奏と NCO クラブ提供の各種フードが華やいだウインターソーシャルを大いに盛り上げていた。

ソーシャル後半には、杉山会長とエグリン准将との懇談

が実現し、嘉手納基地を取り巻く現状や空自及び米空軍隊員に交流の重要性など、大変話題に尽きない懇談となり、今後更なる日米相互連携の必要性が確認された。

A pleasant chat between Brig Gen David S. Eglin and President Sugiyama

司令官挨拶でエグリン准将は、2019 年以来 3 年ぶりのウインターソーシャルを開催でき、日米の友好を深めると共に新旧の友人知人との交流が出来たことを大変嬉しく思われ、参加者全人に対して感謝の言葉を贈られた。また、本来司令官宅での実施を予定していたが、前日から未明まで大雨により、司令官宅前庭が水浸しで急遽 NCO クラブに実施会場が変更となり、準備に携わった NCO クラブ関係者及び第 3 海兵隊音楽隊のメンバーの臨機応変な対応を労った。

参加者は、3 年ぶりの基地関係者との交流が実施出来たことを全員が大変嬉しく思い、華やかなクリスマスツリーをバックに記念撮影に興じ、一足早いクリスマス気分を味わいウインターソーシャルを楽しんだ。

（相原沖縄支部事務局長記）

第 374 空輸航空団　横田基地
374th AW at Yokota AB in Dec.11 '22

12 月 11 日（日曜日）午後 1 時から横田基地内将校クラブにおいて第 374 空輸航空団司令官アンドリュー L. ラダン大佐(Col Andrew L. Roddan)夫妻主催によるホリデーソーシャルが開催された。

ドレスコードは、フェスティブ／スマートカジュアルと指定され、各参加者はクリスマスをイメージした服装で楽しい午後のひと時を過ごした。ご招待により JAAGA から福永、村田、朝倉理事が参加させて頂いた。

(from left) Col Kuroda, Fuchu Base Commander, Col Izuhara, Yokota Base Commander, Brig Gen Jesse J.Friedel, Col Andrew L. Roddan, and JAAGA Directors

主催者挨拶としてラダン大佐は「この大切なホリデーシーズンに皆様をお迎えできますことを大変光栄に思います」「ホリデーは私たちの人生を共に過ごす友人や家族と祝うための期間です」「この大切な時間は一体感、寛容さ、感謝を通じて私たちに団結力をもたらしてくれます」と挨拶された。

今年は特別ゲストとして基地内のバレエ教室に通う小さなプリマたちが迎えられ、可愛いくるみ割り人形のバレエ演技がホリデーソーシャルに花を添えた。ラダン大佐はプリマ一人ひとりに赤い花を手渡し、素敵なダンスに感謝を述べられた。

Col Andrew L. Roddan hands a flower to small prima ballerinas

基地周辺地域の市長、市議会議長をはじめ約 80 名の招待者と、約 40 名の基地関係者との久しぶりのパーティ形式での再会があり、これらを通じ地域の方との交流が日米間の強固な団結のためには重要であることを実感した。

（朝倉理事記）

新入会員紹介

正会員（9 名）

氏　名	住　所	氏　名	住　所	氏　名	住　所
長谷川　礼司	東京都多摩市	島津　貴治	東京都目黒区	阿蘇　晋一	千葉県佐倉市
引田　淳	東京都練馬区	井上　剛	神奈川県横浜市	高草木　浩寿	東京都西東京市
猿渡　辰也	千葉県鎌ヶ谷市	北村　靖二	埼玉県入間市	井筒　俊司	千葉県我孫子市

個人賛助会員（4 名）

氏　名	住　所	氏　名	住　所	氏　名	住　所
吉良　貴好	福岡県筑後市	尾和　克彦	東京都港区	多智　俊夫	石川県小松市
月岡　小百合	東京都品川区				

令和５年度ＪＡＡＧＡ事業計画

事業項目/実施時期		1/四			2/四			3/四			4/四		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
日米隊員の激励等	日米共同訓練参加隊員の激励	↔	↔	→	←	↔	→						
	日米隊員の表彰(JAAGA AWARD 2023)										←	↔	→
	日米隊員の交流活動(日米相互特技訓練)等激励	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
米空軍軍人の日本研修等支援	防大留学米空軍士官学校学生の研修支援				←	↔	↔	↔	↔	→			
	スペシャル・オリンピックスの支援							←	横田、三沢	→			
JAAGAと航空自衛隊・米空軍との交流	SPORTEX23							←	A	→	←	B	→
	指揮官交代行事等への出席	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
	訪米事業				←	↔	→						
	在日米空軍各基地との連携の強化	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
	米空軍慶弔への対応	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
	関係団体との交流(JANAFA、横田基地7クラブ等)	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
広報及び広報協力	日米要人等の講演	第5空軍司令官 5/16									←	空幕部長等	→
	米空軍基地等の研修				←	横田	→				←	嘉手納	→
	日米安保等に関する広報活動(米空軍広報記事の会報掲載)		←	→					←	→			
	会報の発行、配布		←	→					←	→			
	一般広報(HP運営、パンフレット作成、グッズ贈呈)	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
総会		5/16											
運営管理	会勢拡大等(会員管理、会勢拡大)	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
	支部との連携	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
	事務所の運営と備品等の整備	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→
	会員名簿の作成、配布								←	→			
	役員会(★)及び理事会(☆)	☆	☆	★	☆		★	☆	☆	★	☆	☆	★
	会計監査及び物品監査		(R6. 4)										
その他	創立30周年(令和8年)記念行事のための経費積立	←	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	→

令和５年度 JAAGA 役員

職　名		氏　名　　（青字：新任）	
会　長		丸茂吉成	
副会長		福江広明、上田知元、小野賀三	
監　事		内山隆弘、山本祐一	
理　事	理 事 長	前原弘昭	
	副理事長	武藤茂樹	
	企画	荒木淳一、山田真史、増子豊、上ノ谷寛、引田淳、菊田哲	
	総務	深瀬尚久、大浦弘容、荒木文博、三谷直人、井上浩秀、長田国男、山倉幸也（兼務）、金古真一、荒木哲哉、島津貴治	
	渉外	川口泰志郎、藤田信之、村田圭史、朝倉譲、岩崎仁彦、川波清明	
	会員	今瀬信之、西村弘文、山倉幸也、野澤隆一	
	広報	福永充史、浅井玲、池田五十二、太田徹、竹内由則、菅原政弘	
	財務	平元和哉、吉川礼史、大岩卓弥、宮本裕徳	
支部役員	支部長	池添孝史（三沢）	丸野礼治（沖縄）
	支部事務局長	山本親男（三沢）	相原弘介（沖縄）
顧　問		岩崎茂、小野田治、山崎剛美、平田英俊、石野次男、福井正明、清藤勝則、四ツ家邦紀（ホームページ担当特任）	

JAAGA 退任役員　ご貢献に感謝いたします

職　名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
会　長	杉山 良行	理　事	吉田 浩介、渡邊 博史、長島 純	顧　問	齊藤 治和

賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400 ～ 2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしています！

【法人賛助会員の皆様】30 社
株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、有限会社エイム、株式会社エクシオテック、沖電気工業株式会社、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、富士通株式会社、渕上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱商事株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレシジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド
【団体賛助会員の皆様】2 団体
ハイフライト友の会、三沢市防衛協会
【個人賛助会員の皆様】94 名

投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、お蔭様で令和 5 年 7 月で創立 27 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。「JAAGA だより」も、JAAGA 活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様（会員に限らず現役隊員の皆様）からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしています。

【連絡先】（郵便）〒 160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会 広報係
（メール） pubaffair@jaaga.jp

"MILK ON-BOARD" 富岡幹博 会員作挿絵（17 ページ）解説

「C-46 輸送機による初の災害派遣における物量投下ミッション」

古仁屋大火（1958 年 12 月 27 日の深夜に奄美大島の南部にある瀬戸内町古仁屋地区で発生した火災、焼失戸数 1628 戸（約 90%）で 5300 人余りが被災）において、空自の C-46 輸送機 4 機が災害派遣（救援物資の物量投下）を行った。

表題の「MILK ON BOARD」は、積荷がミルク、小麦粉、衣類など 7 トンであったことに由来する。

日本赤十字社やキリスト教団体等から提供された救援物資は、陸自練馬駐屯地へ集めらて第 1 空挺団員の手で空中投下できるように梱包したのち米空軍立川基地（現陸自立川駐屯地）に移送されて空自 C-46 輸送機 4 機により新田原基地経由で奄美大島北部の和野飛行場（現奄美空港）上空から物量投下により被災住民に届けられた。

官民協力、統合、日米共同による災害派遣が行われた。65 年前のことである。

会員募集

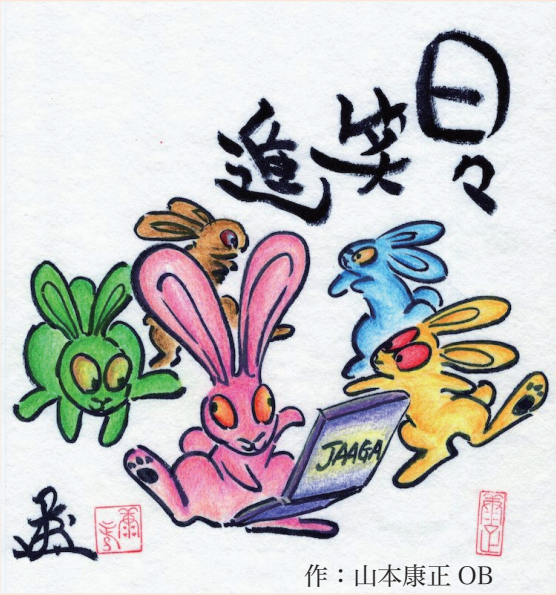
○ 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 9 名、賛助会員 4 名の合計 13 名の入会を得ることができました。
○ 令和 5 年 5 月 31 日現在、正会員数 258 名、個人賛助会員数 94 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 31 社となっております。
○ 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。
なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

【入会資格】
正　会　員 ：航空自衛隊の OB
賛 助 会 員 ：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】
郵　便　　：〒 160-0002
東京都新宿区四谷坂町 9-7　ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会　会員係
メール　　：membership@jaaga.jp

編集後記

◇編集作業の最中、G7 サミットが広島で開催された。G7 のリーダーが平和記念公園に集まり、慰霊碑に献花し、原爆資料館で全員が直筆で記帳、原爆の怖さを肌で感じて核兵器が使われない世界を目指す。核兵器を使われないようにしようという強い意志を演出した日本に光を感じる。◇日本の安全保障の基軸となる日米同盟、中でも重要な日米空軍・宇宙軍間の協力や連携に、丸茂新会長の指導のもと少しでも役に立てる活動を目指したい。◇広報チームに今年度から新メンバーとして菅原政弘理事が加入しパワーアップ、引き続き会員の皆様の協力をいただきながら個性とチームワークで「JAAGA だより」の編集に取り組みます。（編集長）



作：山本康正 OB

◆やばいと思ったら笑うのが一番「日々笑進」(F)
◆コロナ禍が過ぎ、街にノーマスクの人たちが増えた今日この頃。いろいろな行事も復活し、忙しい毎日を過ごしています。(A)
◆アメリカで大谷翔平選手、イングランドで三苫薫選手、アフリカで早田ひな選手が活躍している。海外で活躍している自衛官を日本人にもっと知ってもらいたいです。(I)
◆先輩方から「もっと広報を！」との声を頂き、自分には何ができるか考えています。まずは「だより」をしっかり発行すること。残念ながら大きな影響力を持った方との繋がりはありませんので、小さな街の自衛隊家族会とのご縁を大切にして、「アンバサダー」として自身の体験談などを話していきたいと思っています。(O)
◆ウォーミングアップ中の新米広報理事です。だより作成業務の流れもまだよく分かっていませんが、微力ながら充実した広報活動のお役に立てるよう精進して参ります。(S)
◆5 月 6 月、この時期は各種組織の年度総会が、コロナ後ということで再開されました。こうなることは分かっていたのに、原稿が遅れて反省しています。(T)

編集担当（広報理事）：福永充史、浅井玲、池田五十二、太田徹、菅原政弘、竹内由則
JAAGA だよりは、ホームページからもご覧いただけます（創刊号から第 49 号までは「20 年の歩み」に掲載）。
（JAAGA ホームページ：http://www.jaaga.jp/）